自然現象にもとづく地名 (1)

気象地名——雨包と天堤

平田信芳

植物地名・動物地名も一通り眺めて来た。書きもらしもあるが未練を断ち切り、題材を変えることにした。花鳥風月に詩情を抱いて五・七・五で表わすのが俳句、その音や色や形に感動して自由奔放に表現するのが芸術だと私は考える。それらに比べて史的対象の追求は直観的に処理出来ない非情な面を内包しており、冷めた眼で眺めなければならない。歴史は読むと面白いと云われるが、労多くして功の少ない研究分野でもある。

昭和五十八年に『角川日本地名大辞典46』が登場して以来、営々と地名カード作りをしている。カード作りを通して不思議な地名に出合った。雨包(アマツツミ)もその一つである。鹿児島県の「アマツツミ」は36例。

雨包(19)——阿久根市折口・脇本、加世田市川畑・唐仁原、長島町指江、祁答院町蘭牟田、伊集院町下神殿、川辺町上山田・平山・清水・野間、頴娃町牧之内、別府、開聞町仙田。鹿屋市田崎、吉松町川西、末吉町二之方、大根占町神川、根占町川北。

雨堤(12)——宮之城町時吉、伊集院町下谷口、吹上町今田、鹿屋市西原、西之表市国上、中種子町油久、志布志町安楽・夏井、末吉町諏訪方、深川、財部町南俣、栗野町幸田。

天堤(2)——鹿屋市古江、南種子町平山。

天包(2)——指宿市岩本、知覧町東別府。

アマツツミ(1)——加世田市内山田。

長年首をひねっていたので地名研究会の例会で尋ねた。故小川亥三郎氏から「雨に包まれたような湿気の多い所」と教えて頂いた。雨包の19例がそれに当るだろう。一方、小幡晋『鹿児島地名考』はアメツツンと読み「川の合流点とか川によって浸食崩壊した地形に多く、他府県ではあまり見られない鹿児島県の特別地名」「降雨のたびに鉄砲水や土石流のために田地が埋まり、人家が被害を受けるような場所」と解説する。これは雨堤・天堤を意識した地名解釈である。

私は「アメツツン」の具体例を知らない。『角川日本地名大辞典』で見るルビはすべて「アマツツミ」であり、県外にも雨包山(愛媛県東宇和郡)・天包山(宮崎県児湯郡)・天堤村(佐賀県鹿島市)の地名例がある。雨堤(大分県大野郡)はアマヅツミと読み、此処は「農業用水に恵まれず、近世以降の溜池によって灌漑している」らしい。アマツツミも二通りの解釈があり、一筋縄ではいかない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (2)

気象地名――霧　島

平田信芳

花は霧島タバコは国分――タバコは専売品なので吾々が推奨できるのはミヤマキリシマだけである。毎年五月末から六月初めに霧島連山に登れば天国の花園のようなその花盛りを楽しむことが出来る。これは今後も大いに宣伝したい。一方、霧島連山の高峰高千穂峰や韓国岳の頂きが棚引く霧の上に島状の姿を見せるのは、気を付けていても数年に一度あるかなしである。島のように浮かぶ山の頂きを実際に見た時、霧島とは言い得て妙だと昔の人々の命名に感心もした。

小字一覧で「霧島」地名を拾うと意外に多い。しかしこれは自然地名でなく「霧島」信仰が広まって各地に霧島神社が建てられ、その社殿や社領にもとづく二次的命名である。その分布を大隅と薩摩で分けてみた。

大隅側（18例）――大口市金波田・吉松町川西・蒲生町蒲生・霧島町田口・財部町北俣・同南俣・末吉町諏訪方・同二之方・同岩崎・同南之郷・松山町宮下・大隅町恒吉・串良町細山田・吾平町麓・垂水市新城・鹿屋市横山・根占町川北・中種子町野間

薩摩側（12例）――出水市武本・高尾野町下水流・宮之城町虎居・川内市西手・串木野市下名・郡山町西俣・鹿児島市五ヶ別府・川辺町下山田・同宮・同高田・坊津町坊・開聞町十町

内陸部に多く見られることは「霧島」信仰が陸地伝いに広まったことを示している。

ところで霧は川内川や天降川など割合に大きな河川の流域によく発生する。とくに秋から冬にかけて急激に冷える頃に多い。水は空気に比べると温度の変化がにぶく、川面の空気が冷えると霧やもやが発生する。霧ははれると晴れになると言われるので楽しいが、日本語の表現はまことに微妙で、霧ともやとの区別となるともやもやとしてよく判らない。同様の現象を霞（かすみ）と表現することもある。霞か雲か分けにくくなると、匂いぞいずると誤魔化してしまう。

ぼんやり見えるようで見えないのが霞ヶ関の春霞。東京都知事選挙のようなものだろう。朝霧・夕霧・夜霧の語句があるが、霧立ちのぼる秋の夕暮で知られるように夕霧が代表的とみなされる。夕もやの表現もあるが、夜もやはよもやあるまいから朝もやがもやの代表的な状態となる。霧に包まれると何が何やら見分けがつかないが、もやもやとしながらもある程度見えるのがもやなのだろう。何だか霧隠れの説明となったようだ。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (3)

気象地名――東風泊

平田信芳

梅の花を見て梅干を連想する人は少なく、多くの人は菅原道真の故事を想起するに違いない。東風吹かば匂い起こせよ梅の花、あるじなしとて春を忘るなと。さらに風流人は梅ごち・桜ごちなどの言葉を持ち出して春の暖かさを詠むに違いない。風流とは縁遠い朴念仁の私はそんなことよりも雨ごち・時化ごちのことわざの方が気になる。

北半球での低気圧は時計の針と逆回りの風が吹くので、風向きが東寄りの場合は下り坂の天気と判断する。ことわざの雨ごち・時化ごちはそんな時に役立つ。風が北から西へ回ると、やがて雨は上がると考えて傘を持たずに家を出る。鹿児島市は都合のよいことに、東側に桜島がでんと控えている。桜島の降灰が舞い降りる時はその翌日ぐらいに雨が降り出す。また雨が降る時には必ず桜島には厚い雨雲がかかるし、桜島に鉢巻雲が現れるとやがて晴れることを経験的に知っている。

このように風向は気象の変化を的確に教えてくれるし、鹿児島県は古来海上交通を主として栄えた土地柄であるので東風泊（こちどまり）とか南風泊（はえどまり）という船舶の避難地名が多くあるはずだと思って地名カードを引き出してみた。高山町有明に東風泊が一例あるだけで、目論見は的はずれの形となった。地名予想がはずれたので「東風」の付く地名を申しわけ的に並べてお茶を濁すことにする。

東風隠（知覧町東別府）、真東風（加世田市内山田）、コチド子（加世田市津貫）、コチナシ（市来町川上）、コチ柳谷（鹿児島市皆与志町）、東風（フチ・知名町赤嶺）、東風増（フチマシ・知名町上平川）、東風平（フチビヤ・知名町屋者）、東風平前（フチビヤメ・知名町西原）

知名町の場合、海から遠くはないが海岸沿いでなく陸地の地名、ただし海からの東風がよく当たる所に立地している。知覧・加世田・市来・鹿児島の「東風」地名は地図上で位置を求めるとすべて内陸部になる。鹿児島県では高山町の東風泊だけが海上交通に結び付いていた唯一の地名例である。江戸時代、大坂・江戸に向かって太平洋を航行した船が東風に遭遇した時、逸早く逃げ込む避難港だったのだろう。ゴンザ・ソウザが乗った船や宅万喜三左衛門の船が東風泊にさっさと逃げ込めば漂流物語もなかっただろうにと想像する。薩摩の船頭たちは「北東風（きたごち）は雨」のことわざを無視したのだろうか。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (4)

気象地名――風穴・風口・涼松

平田信芳

昔の人々は住まいの地を定める場合、日当り・風当り・水と食糧の便・崖崩れや水害の危険性・外敵の防禦などを考えていた。同時に自然に逆らうことはしなかった。それでも暴風雨・洪水・干害・虫害などの天候不順に苦しめられた。その時はひたすらに恐れおののいて神の怒りを鎮めるべく祈るばかりであった。それにひきかえ現代人の住居選定基準は、土地の値段・交通の便・学校や病院との距離などが主となり、日当り以外は自然現象に配慮することもない。いつかは自然の猛威にしっぺ返しを食うに違いない。

風向を考えた場合、気圧配置によって東・西・南・北いろいろな方向から風が吹くわけだが、北風は寒く、東風と南風は雨をもたらす。西から吹く風は春先に黄砂をもたらすが、相対的にみれば西風がよい風で歓迎されることになる。西風が吹いて涼しさを憶える所に風穴・風口・涼松などの地名が付いている。私の地名カードにある県内の小字を以下に提示しよう。

風穴(かざあな、12例)――鹿児島市下福元・鹿児島市平川・指宿市東方・垂水市中俣・枕崎市西鹿籠・下甑村片野浦・大浦町大浦・笠沙町赤生木・志布志町内之倉・有明町野神・輝北町上百引・溝辺町竹子

風穴平(かざあなびら、2例)――指宿市東方・吹上町湯之浦。

風口――川内市大小路(かざぐち)・垂水市新城(かぜぐち)の2例。

涼松(すずみまつ・すずんまつ、25例)――鹿児島市皆与志・阿久根市西目・阿久根市脇本・川内市楠元・加世田市内山田・加世田市津貫・枕崎市別府・西之表市西之表・西之表市住吉・高尾野町江内・野田町上名・市来町川上・伊集院町下谷口・日吉町山田・吹上町和田・笠沙町赤生木・川辺町上山田・頴娃町御領・頴娃町別府・喜入町前之浜・喜入町中名・中種子町田島・輝北町諏訪原・吉田町本城・郡山町川田。

農作業の疲れをいやすために声を掛け合って涼松で休んだり、風口の道路脇にたたずんで涼しい風を受けながらひと休みするのも人々の生活には必要だろう。現代人にはそこらあたりが欠けている。英語のことわざに曰く、Rest is not idleness(休息は怠惰にあらず)。一方、Idleness is the Parent of all vice(小人閑居して不善をなす)と。怠惰な生活に風穴をあけることは必要だが、稼ぐことばかりに追われる人生は味気ない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (5)

平田信芳

気象地名——志風・尻風

柳田国男の「風位考」にアユチ・イナサ・ナライなどの風の呼称が、多くの実例をあげて解説してある。地方によって風位のニュアンスが異なるが、イナサは南東から吹く風、ナライは北西から吹く風、と理解してよさそうだ。小学校五年生の頃に、日本列島では夏には南東季節風が、冬には北西季節風が吹くと教えられ、以来観念的にそのことを理解して来た。ところがこの二十四～五年間、すなわち四分の一世紀を超える間に、桜島の降灰によってそれを肌で理解するようになった。

アユチから変化した言葉がアイチであり、それが愛知郡・愛知県の語源になったとされている。「風位考」や「海上の道」などによれば、「チ」は風を表わす語であり、海から来る風をアイノカゼとかアユチと呼び、魚・海藻・流木などいろいろなめでたいものをもたらす風とされている。民俗学ではこの解釈が一般的だが、地理学から出発した地名研究者は、アイの風や鮎と結び付けるのは付会説と片付ける。鹿児島県にアユチ・イナサ・ナライなどの地名があることに気付いていないが、柳田国男説の方が解釈としては面白い。コチ（東風）・ハヤチ（疾風）などの表現から考えると、「チ」が風を表わす語のようだと門外漢ながら理解出来る。鹿児島で「チ」を含む地名を探すと、沖永良部島にチナ（知名）・テデチナ（手々知名）がある。沖永良部をよく知っている人に、風に関係する地名ではないのかと尋ねるが、いまだに確証をつかめない。

鹿児島県の「風」地名は、ごく平凡に「○○風」とするものが多い。文字面からどのような「風」だと大体理解できるが、解釈に苦しむものもある。その一例に志風がある。新聞でよく見かける苗字であり、その由来は加世田市の小字にあるとみてよい。

加世田市武田——志風・尻風原・下尻風。

加世田市内山田——志風・志風原・志風頭。

大字武田と大字内山田の境にある地名と推定できる。6例の小字から考えると、志風イクォール尻風と理解してよい。しかし尻から吹く風とはどのような風なのか、見当もつかない。どちらもあて字の可能性が強い。カセダのカセとシカゼのカゼが手掛かりになるとも思えない。全国的に類似例を探そう試みたが、角川「日本地名総覧」に志賀瀬（しがせ・熊本県）とあるのが唯一の似た地名。しかし濁点の位置が異なる。「しかぜ」は現段階では意味不明。手掛かりが出て来るのを待つしかない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (6)

気象地名——大　嵐

平田信芳

「嵐」の付く地名が鹿児島県内に四十例ほどある。そのうち三例が旧薩摩国の中に、一例が徳之島にある。

嵐山（宮之城町二渡・日吉町日吉）

嵐川（天城町瀬滝）

嵐田（野田町上名）

昔も今も嵐の吹き荒れる中を出歩くことは考えられないから、「嵐」地名は少ないとみてよい。また嵐に痛めつけられた記憶などは忘れ易い。「嵐」地名に接すると、よほど骨身にこたえた嵐だったとも思う。一方、嵐山などは京都の景勝地を意識しての命名だったのかも知れない。これらはとも角としても残りの三十六例はすべて種子島にある。台風常襲地帯ならではの地名と納得させられる。以下は種子島の「嵐」地名。カッコ内は大字を示す。

大嵐（古田・住吉・増田・野間・中之上・西之）、平嵐（西之表・安城・田島）、田代嵐（安城・古田）、高嵐（西之表・増田）、**麦嵐**（西之表・国上）。以下は各一例。**赤木嵐**（国上）、**笹嵐**（現和）、**薄嵐**（西之）、**椿嵐**（西之表）、**萩嵐**（国上）、**柳嵐**（西之）、嵐山（野間）、嵐野（国上）、秋野嵐（西之表）、嵐シ（平山）、落嵐（西之表）、小比良嵐（西之表）、山ノ小嵐（安城）、河嵐（住吉）、奥嵐（安城）、中嵐（西之）、隅之嵐（住吉）、喰シ嵐（西之）、正円嵐（西之）。

太字で示した地名は植物と嵐を結び付けたものとみられる。嵐に痛めつけられた草木の風情にもとづいて命名されたのだろう。意味の判らない地名もあるが、ほとんどが自然にも気配りを示す種子島の人情に導かれた命名と理解してよさそうだ。

歴史をひもといてみると種子島には多くの船が流れ着いている。種子島の人々は嵐で痛めつけられてようやく陸地に辿り着いた乗組員を優しく受け入れ、面倒をみて来た。命を助けられたことに対する謝礼の品が、他に類例のない文化として残されて来た。その一例が鉄砲伝来である。一五四三年門倉岬に漂着したポルトガル人が鉄砲を伝えたことは日本史上有名な出来事である。西之表市歴史資料館は鉄砲博物館の名を与えてもよい。アメリカの商船カシミア号船員の救助物語。インギー鶏を残した英国の帆船ドラメルタン号など、話題は豊富である。宇宙ロケット基地だけでなく、黒潮と嵐がもたらした文化を見直す必要があろう。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (7)

気象地名——荒　平

平田信芳

今年の梅雨明けはどう考えても異常。七月も終る頃にようやく梅雨明け宣言がなされたが、その後は連日の雨。戻り梅雨かなと女房に話すと、台風が近づいているという。机の脇にラジオを置いて台風情報を聞こうとしたが、一向に放送されない。突風が吹くたびに書斎は激しく揺れる。私の家は多賀山の西側にあり、従来どのような台風でも悩まされることはなかったので少々驚いた。国道10号沿いにマンションが並び始め、山越しの風が跳ね返るようになったのかも知れない。高層ビルの出現は日照権問題を発生させたが、今後は風向による迷惑も考えなければなるまい。

夜に入って風は止んだ。昼間情報を流さなかったラジオが頻繁に台風5号の情報をしゃべり始めた。午後五時二十分頃、鹿児島市内で風速32メートルを観測しました、と。

前回「嵐」地名が種子島に多いことを紹介したが、それに対応させる意味で今回は「荒平」をとりあげる。鹿児島県では山の中腹にあるちょっとした平坦地を「平」と呼ぶ。穏やかな傾斜地で、古そうな神社があったりする。観音平・権現平・地蔵平・諏訪平・天神平などの地名も多い。

荒平——鹿児島市中・喜入町前之浜・山川町成川・頴娃町郡・枕崎市枕崎・川辺町平山・加世田市津貫・笠沙町片浦・笠沙町赤生木・金峰町花瀬・金峰町大坂・東市来町伊作田・東市来町寺脇・市来町湊町・川内市寄田・川内市山田・川内市中村・阿久根市脇本・長島町平尾・入来町副田・祁答院町上手・大口市木ノ氏・大口市針持（薩摩地方小計23例）

蒲生町久末・姶良町平松・加治木町小山田・加治木町西別府・加治木町辺川・牧園町三体堂・牧園町万膳・牧園町高千穂・栗野町幸田・栗野町米永・菱刈町市山・国分市川原・福山町福山・垂水市牛根麓・輝北町上百引・鹿屋市天神町・根占町山本・佐多町伊座敷・西之表市国上・西之表市西之表（大隅地方小計20例）

荒比良—川辺町神殿・川辺町野間・垂水市本城（3例）

一般的にいうと、「荒平」は海辺に近く風当りの強い所に立地することが多い。鹿屋市の荒平は古江と高須の中間、海岸に面した岩山もある。そこで切り出した溶結凝灰岩は石垣用として、「荒平石」の名で戦後もしばらく出回った。赤い石なのですぐ判る。荒平石を用いた石造物は海を越えた指宿地方でも見られるが、セメント工事万能の世の中、思い出してくれる人もいない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (8)

気象地名——姥懐

平田信芳

その昔、自然発生的に名付けられた地名を眺めていると、姥捨山はあっても、爺捨山は聞かない。爺さん達は好々爺ぞろいなのだろう。好々爺たちの墓を探し回っていると、あちらこちらで助兵衛という名を刻んだ江戸時代の墓石を見かける。助兵衛さん達は生存中、助平とは無縁だったろうにと気の毒に思う。

助平根性も消え失せる年齢になり、同世代以上の女性が派手な格好と厚化粧をしてよたよた歩いているのを見せつけられると、姥桜を通り越して山姥・蓑婆尉の類だなと思う。若くても濡れ女・雪女などは恐ろしいが、山姥となれば尚更である。ほどほどな身だしなみを願う意味をこめて県内の「姥」地名を眺めることにする。

姥ヶ迫・乳母迫——鹿児島市郡元・指宿市池田・大口市木ノ氏・鹿屋市永野田・吉田町宮之浦・笠沙町赤生木・串良町細山田

姥山・乳母山——大口市宮人・隼人町小浜・頴娃町別府

姥ヶ谷——川内市網津・志布志町内之倉

姥懐・嫗懐——鹿児島市山田・串木野市羽島

以下は各一例。姥ヶ膳（鹿児島市田上）・姥ヶ崎（高尾野町江内）・姥ヶ宇都（根占町川南）・姥田（大隅町月野）・姥石（末吉町二之方）

姥懐（うばがふところ）を除く「姥」地名は山姥の存在を信じた所だったとみてよい。これらは自然現象とはほど遠く、むしろ民俗的地名と見るのがよい。姥懐は三方が山で日当りが良く、ばっぱん（祖母）の懐にくるまれているような気持を感じる所のようだ。その意味で気象地名に結び付けた次第である。「姥懐」をテーマにした論文を読んだことがあり、日本各地の姥懐を拾いあげてあったのを憶えているのだが、本棚からそれを容易に探し出せない。角川日本地名大辞典は優婆懐（京都府）と姥ヶ懐（長野県）とを立項しており、京都のものは織豊時代の古文書に見える地名とのことで、何だか時代がかっている。

少子化時代を迎え、道で出合う若いお母さん方は前結びに赤ちゃんをしばりつけて歩いている。今の世の中、ばっぱん（祖母）達の背中に背負われている風景などは見かけなくなった。ねんねこにくるまれる以前は、ばっぱんの懐で温められたのだろう。祖母の懐の温もりを懐しむ世代が「姥懐」と名付けたのであろう。子守の方法にも時代の差がある。それも一つの歴史と言ってよい。ばっぱん達は今ゲートボール・団体旅行で忙しい。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (9)

平田信芳

気象地名――日当山

隼人町の日当山は、その昔、日当山郷と呼ばれた時代があった。今は隼人町に含まれてしまい、日当山中学校・日当山小学校・日当山保育園・日当山駅・日当山郵便局・日当山温泉・日当山侏儒どんなどの固有名詞に残っているにすぎない。昭和二十九年に隼人町と日当山町が合併して隼人日当山町になったが、昭和三十二年、自治体名を隼人町に改称してしまったからである。

「隼人」の呼称はボテシの塚とか軍神塚と呼んでいたものを、明治三十六年頃に鹿児島神宮の神官が思い付きで初めは熊襲塚、のちに隼人（はやひと）塚と名付け、それが国指定史跡隼人塚に出世してしまい、それに基づいて隼人〇〇の固有名詞が生まれた次第。

それに比べると日当山には古今集にも登場する歌枕なげきの森があり、日当山温泉には西郷さんもよく湯治に訪れた。泉質は天下一品の部類に入ると思うのだが、余りにも鹿児島空港に近すぎるためなのだろう。県外客は素通り。宣伝不足・観光資源不活用の典型と言っても過言ではあるまい。

閑話休題。日当といえば「日当へ出っと時は悪気が入って帽子冠れ」と、祖父から言われていたことを思い出す。日当ぼっこは説明はいるまい。日当はいうまでもなく「日当りのよい所」に付く地名。県内のあちこちに見られる。いつもの通り角川日本地名大辞典の小字一覧から拾いあげた鹿児島県の「日当」地名を以下列挙する。

日当山――阿久根市大川・根占町川北

日当平――鹿児島市平川・指宿市十二町・頴娃町牧之内・川辺町下山田・吹上町永迫・隼人町野久美田・大根占町馬場

日当――指宿市十二町・頴娃町牧之内・出水市上大川内・薩摩町永野

日当瀬――吹上町与倉・蒲生町白男

平安時代末期の康治元年（一一四二）、大隅国分寺の石造層塔が立てられた同じ年に、天台宗の僧行玄上人が日当山浄土院西光寺という寺を建立した。江戸時代には真言宗の寺となり、その鎮守神である日吉山王社は日当山郷の総廟として崇拝された。その神社は隼人町西光寺に現存している。西光寺は大字名に残っているので「さいこうじ」、浄土院もその読みに苦しむことはない。しかし日当山はどう読むのか。地名「ひなたやま」を意識しての命名だろうが、「にっとう」か「じっとう」か、山は「さん」か「ざん」か判らない。調べても別に日当を貰えるわけではない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (10)

気象地名——日影・夏影

平田信芳

前回とりあげた「日当」と同じ意味の地名が「日向」であり、対照的なものが「日影・夏影」になる。太陽が向かう方向は西だから本来「日向」は西の方にある所と解釈すべきではないかとの疑問を投げかけられ、説明に困ったことがある。その後、全国の電話帳を調べていた時、東北地方にやたらと「日向（ひむか・ひなた）」姓が多いことに気付いた。日向は太陽が向かうことを意味するのではなく、その土地が太陽の方に向いていると人間中心に地名は名付けられるのだと納得した。

日当りの悪い所は作物の育ちも悪く人々にとっては住み良い環境ではないが、「日当」に劣らず「日影」地名も結構多い。昔の人々は「人生には日当もあれば日影もある」と心得ていたのだろう。私の地名カードにある「日影」地名は次のとおり。

日影(14)——鹿児島市岡之原・鹿児島市犬迫・指宿市東方・頴娃町郡・川辺町野崎・下甑村瀬々野浦・宮之城町泊野・薩摩町永野・串木野市羽島・松元町入佐・蒲生町白男・姶良町北山・国分市川原・根占町山本

日蔭(2)——根占町川北・佐多町辺塚

日影平・日蔭平(6)——鹿児島市下福元・指宿市池田・山川町小川・川辺町清水・川辺町神殿・串木野市羽島

夏でも日の当たらない所が夏影（夏蔭）になる。私の地名カードにあるのは三カ所。鹿児島市草牟田・隼人町真孝・大隅町月野である。草牟田の夏蔭城跡は西南之役の戦場の一つであるが、現在は切り開かれて公園となりよく日の当る場所に変貌している。

実はもう一つ歴史上重要な「夏影」地名がある。治承元年（一一七七）に丹波少将藤原成経・平判官康頼・俊寛僧都の三名が硫黄島（鬼界が島）に流される事件があった。長門本平家物語巻第四に「硫黄が島へ流されける」と明記してある。都から島津庄（宮崎県都城市）に送られて来た後「夏影・とかみ・あかさかといふ所を打過て、大隅国けしきのもりにつき給ふ」とある。「とかみ」は止上神社一帯のこと、「あかさか」は財部町下財部に「赤坂」がある。けしきの森は国分市府中にある。都城と赤坂の間に「夏影」があったはずだが、それが消えている。ただし夏木という地名は見出せる。その後、俊寛たちは鳩脇（隼人町野久美田破戸脇）から坊津を経て硫黄島に流されるのだが、平家物語に記されているこの事実を地元国分市・隼人町は日蔭者扱いにしている。何故なのだろうか。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (11)

平田信芳

気象地名――ホメキガ宇都

日当ぽっこは気持がよいが、日当りが強すぎると人々はぼやき始める。太陽光線の熱量はそんなに変りはないはずだが、地形・湿度・風通しなどの具合で、ほめく場所とか帯を解かなければやり切れないなどと思い付く文句を地名として名付けて来た。**母女木**(加世田市川畑)・**ホメキガ宇都**(鹿児島市犬迫・加世田市武田)・**帯取**(鹿児島市中・末吉町岩崎)がその例である。昔、風呂の焚き口で火のほてりにほめきを感じたことを思い出すが、僅か5例では話を進めようもない。横道に入って「風呂」地名を拾いあげ、さっぱりした気分になろう。地名カードを広げてみると垢同様にごろごろ出て来た。

風呂元(14例。鹿児島市川上・頴娃町郡・串木野市下名・東郷町山田・樋脇町塔之原・大口市山野・菱刈町下手・吉松町川添・横川町下ノ・吉田町本名・隼人町小浜・末吉町諏訪方・末吉町深川・輝北町平房)

風呂谷(7例。加世田市唐仁原・川辺町神殿・垂水市海潟・姶良町鍋倉・牧園町三体堂・末吉町諏訪方・大隅町中之内)

風呂迫(6例。阿久根市多田・長島町平尾・宮之城町時吉・宮之城町屋地・祁答院町黒木・金峰町尾下)

津風呂(5例。垂水市海潟・隼人町嘉例川・串木野市下名・長島町平尾・金峰町大野)

風呂口(5例。松元町福山・伊集院町下谷口・鶴田町柏原・隼人町小浜・末吉町南之郷)

風呂宇都(4例。吉田町東佐多浦・吉田町西佐多浦・姶良町平松・加治木町西別府)

風呂前(鹿児島市犬迫・下甑村青瀬)

風呂段(川内市山田・輝北町上別府)

風呂山(宮之城町田原・市来町大里)

以下は各1例。風呂(姶良町下名)・風呂ノ神(郡山町厚地)・風呂之上(串木野市下名)・風呂尻(川内市山田)・岩風呂(枕崎市西鹿籠)・オサブロ(大浦町大浦)・屏風呂(西之表市伊関)・風呂坂(吉松町中津川)・風呂木山(上屋久町楠川)・風呂川(上屋久町楠川)

「風呂」地名は風呂桶のような地形で蒸し暑い所に名付けられた地名との先入観で接して来たが、類型化してみるとその昔岩風呂・湯穴などがあったことを示す地名のように思えて来た。風呂迫・風呂宇都の中には比喩的な地名があるかも知れないが、基本的には「風呂」地名はサウナ形式の岩風呂を示す地名とみるべきであろう。岩風呂と湯穴の分布図作成と現地を歩く必要に迫られて来た。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (12)

気象地名――耳　取

平田信芳

耳取・耳切という地名は、寒風が吹きつけ耳がちぎれるような寒い所に名付けられると単純に考えるのが地名解釈としては的を射ていると思う。Simple is the bestと物事を単純に考える私からみると、地名研究家の諸説は難しく考えすぎで、つきあいにくい。日本の地名研究に先鞭をつけた民俗学者柳田国男が「動物の耳を切り取っていけにえに供えた所」と考えたために、耳取＝犠牲地名説は根強い。さらに「寒い風の吹く所とは聞いたことがない」との地元の人々の話が付け加えられる。また、地名は地形にもとづいて名付けられるのが本来の姿と考える地理学者たちは、パンの耳・札束の耳などの表現があることを引用して、台地の縁辺部に「耳」地名があると解釈する。

私の地名カードでは耳取26例・耳切11例が鹿児島県内に散在する。以下列挙して、どのように考えるべきかの判断は各人にゆだねる。

耳取(19)――鹿児島市坂元・鹿児島市吉野・鹿児島市田上・鹿児島市下福元・加世田市川畑・加世田市内山田・阿久根市波留・野田町下名・鶴田町柏原・宮之城町田原・市来町湊・菱刈町川北・姶良町深水・加治木町西別府・国分市上之段・財部町南俣・末吉町諏訪方・末吉町二之方

耳取尾(鹿屋市大浦)・耳取岡(川辺町上山田)・耳取風(知覧町西元)・耳取鼻(喜入町中名・喜入町前之浜)・耳取原(伊集院町麦生田)・耳取平(阿久根市波留)

耳切(8)――川内市西方・笠沙町赤生木・川辺町平山・山川町大山・山川町成川・垂水市新域・西之表市西之表・西之表市現和

耳切瀬戸(笠沙町片浦)・耳切迫(笠沙町片浦)・耳切山(笠沙町赤生木)

さて、昔寒い時代があった話をしよう。現在南九州では見ることも出来ないが、平安時代・江戸時代の大隅国は紫草の特産地だった。現在、紫草の自生は十和田湖付近でないと見られないという。十和田湖付近の気温ならば耳が切れそうな寒風も当然と納得するだろう。

枕崎から坊津へ向う耳取峠は景色のすばらしさに見取れるからとの説がある。そのことは江戸時代も宣伝されて多くの文人墨客が坊津を訪れている。水戸黄門の家来「助さん」こと佐々助三郎も坊津の詩を残しているが、伊能忠敬の坊津評は冷めている。「坊津岬ハ九州一ノ絶景と云伝、八景あり…眺望するに九州一とも云難し」と。坊津八景に耳取峠は出て来ない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (13)

色彩地名――赤池・赤水

平田信芳

七高ボート部歌に「血はたぎるかな薩南は、酔うによき国赤き国」という一節があった。赤は左翼分子が振った赤旗に由来するものでなく、青竜(東)朱雀(南)白虎(西)玄武(北)四神の色分けにもとづく。大相撲の四本柱の赤房・白房などと同類で、南の国薩南を表現する色は朱雀の赤になるのである。

南シナを訪れたことはないが、赤土が目立つのかも知れない。数年前旅人の暇にまかせてシンガポール島を環状線で一周したが、開発工事が行なわれている所の地肌はやけに赤かった。なるほど南国の土は赤いと納得した。

さて鹿児島県の水辺には「赤」の付く地名が多い。赤池・赤水・赤仁田・赤牟田などである。以下県内の地名例を列挙する。

赤池(6)――加世田市武田・大口市曽木・菱刈町川北・牧園町万膳・牧園町三体堂・高山町前田

赤水(11)――山川町岡児ヶ水・加世田市津貫・入来町副田・鶴田町紫尾・横川町下ノ・牧園町持松・桜島町赤水・鹿屋市獅子目・鹿屋市大姶良・佐多町伊座敷

赤仁田(17)――枕崎市西鹿篭・笠沙町赤生木・加世田市内山田・川辺町上山田・金峰町大坂・吹上町与倉・伊集院町上神殿・東市来町養母・東市来町伊作田・川内市寄田・長島町城川内・樋脇町塔之原・入来町浦之名・宮之城町山崎・薩摩町永野・蒲生町漆・姶良町木津志

赤牟田(6)――川辺町野間・吹上町中之里・蒲生町米丸・西之表伊関・西之表市現和・西之表市安域

これらの地名を白地図の上に点で記すと、傾向がはっきりする。赤池と赤水は大体同じような分布を示す。岩の間からしみ出た水に赤サビが生じて赤水と呼ばれ、それが溜まって池を作ると赤池になる。低湿地の赤仁田・赤牟田も化学的には同類と見られる。ただ赤仁田・赤牟田が大隅半島では見られない。仁田も牟田も湿地を指す地名だが、牟田は西日本で仁田は東日本で用いられた。鎌倉時代に関東の武士たちが九州各地に移り住んで来たので、東日本の仁田という表現が移入されたにすぎない。仁田はその痕跡地名とみてよい。

古墳時代～奈良時代に活躍した隼人(はやひと)たちは食器に丹塗(にぬり)の高坏(たかつき)を用いた。赤い色を好んだ隼人たちの芸術的感性は高かった。丹は酸化鉄であり、赤水・赤池・赤牟田・赤仁田などから丹の原料を調達したのであろう。

自然現象にもとづく地名 (14)

色彩地名――赤石・赤岩

平田信芳

その昔、串木野市や阿久根市の海岸で「赤玉」の逸品を見つけることが出来たという。赤玉と言ってもぶどう酒のことではない。研磨すればメノウは足元にも及ばないものだそうだ。地名の分布からその話を考察してみようと考え、地名カードから赤石と赤岩を拾ってみた。

赤石（21例）――鹿児島市持木・鹿児島市有村・鹿児島市古里・鹿児島市黒神・隼人町小浜・隼人町松永・垂水市新城・根占町辺田・田代町川原・佐多町伊座敷・西之表市国上・南種子町島間・指宿市西方・開聞町仙田・頴娃町牧ノ内・頴娃町別府・知覧町塩屋・笠沙町片浦・笠沙町赤生木・伊集院町下谷口・市来町川上

赤岩（11例）――鹿児島市持木・加治木町西別府・溝辺町有川・吹上町小野・吹上町永吉・串木野市荒川・串木野市羽島・川内市田崎・川内市東手・高尾野町江内・東町山門野

これらの地名を白地図の上に点で記してみると、赤石は主として桜島および錦江湾周辺部にみられる。ということは姶良カルデラや池田カルデラの外壁部およびその噴出物と関係が深いとみてよい。一方、赤岩は薩摩半島の北西部に集中的にみられる。基層を構成する岩石で比べると北薩の山々は玄武岩、錦江湾周辺部は安山岩であり、年代的には北薩の山の方が古い。したがって発生史的にみれば赤岩の方がはるかに古く、その中に「赤玉」が含まれていたことになる。串木野市・阿久根市の海岸に赤玉があったことは、赤岩という地名の分布からなるほどと合点がいく。

私は赤玉を見たこともなく、宝石や装飾品にも無縁で、もっぱら名称の由来だけに関心を傾けている。赤石・赤岩などは地名学的に解説不要のそのものずばりの表現と考えればよいはずだが、やたらと理屈をこねないと「学」の名が付かないらしい。例えば、明石。発生的には赤石に由来すると思うのだが、アカ・イシの略か、あるいはアガ・シの清音化かと解釈する。そしてアガはアゲ（上）の転で「高地・微高地」をいうか。ハガ（剥）の転で、崩壊地名を示すか、となる。アカ（赤）は赤い色、とくに土壌の色に由来するか。アカ（明）は、はっきりした意、何かの露出した状態を示すか。あか（垢）で湿地の意か、などと解釈する。こんな解釈が地名語源辞典に大きな顔をして載っている。辞典と名の付くものには間違ったことは書いてないとみるのが世の中の常識。背筋に寒さを感じる。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (15)

平田信芳

色彩地名――赤坂

「坂」の付く地名を地図上で拾いあげていくと、昔の道がどこを通っていたかが大体判る。また石ころが多い扇状地では「石坂」、岩場を登る所では「岩坂」の地名が付く。主題は色彩地名なので、これらには触れない。色彩に関係があるのは「赤坂」と「白坂」。白坂はいずれとりあげる予定。「青坂」は皆無。「黒坂」は鹿屋市下高隈と菱刈町前目の2例だけ。以下、赤坂および類似地名を地名カードから拾いあげてみた。

赤坂（29例）――長島町平尾・出水市武本・川内市楠元・川内市山田・串木野市上名・下甑村青瀬・吹上町田尻・吹上町和田・加世田市武田・加世田市内山田・加世田市小湊・笠沙町片浦・坊津町泊・知覧町長里・鶴田町鶴田・大口市山野・吉松町川西・吉松町中津川・姶良町北山・加治木町木田・財部町下財部・末吉町二之方・串良町有里・西之表市西之表・西之表市住吉・西之表市安城・中種子町牧川・中種子町増田・南種子町茎永

赤土坂（2例）――川辺町平山・田部田

釜土坂（3例）――加世田市内山田・川辺町本別府・隼人町小田

これらの地名から赤坂は、赤土または釜土（かまつち）と呼ばれる粘土質の坂道の呼び名として名付けられたことが判る。赤土とは俗に赤ボッコとか赤ホヤと呼ばれるもので、地質学的には約六千三百年前の鬼界カルデラの噴出物を指す。この赤ホヤ層の下に縄文時代前期の遺物が、上に縄文時代後期の遺物が埋蔵されている。県内での赤ホヤ層の厚さは大体40～60センチメートル。

「赤坂」という地名は種子島および薩摩半島に多く、屋久島および大隅半島南部に見られないことから、赤ホヤは南西からの風いわゆる偏西風で薩摩半島にもたらされ、種子島には強い西風で降り積ったと推定することが出来る。赤ホヤは黄褐色土とか赤褐色土と説明されることもあるが、赤ボッコとか赤土と単純に表現した昔の人々の感覚の方が理解し易い。

赤ホヤの上に弥生・古墳・歴史時代の遺跡に関わる黒ボッコと呼ばれる層がある。黒ボッコの下部までの地表からの深さは約60センチメートル。県北部では霧島もしくは桜島の火山噴出物の推積と考えられるが、この層が坂道となっている所はほとんどないのだろう。黒坂という地名が少ないことから、そのように考えられる。赤ホヤの下に粘土質の黒土層があるが、これが地表になっている所はまずない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (16)

色彩地名——赤崎と赤迫

平田信芳

赤松・赤生木などの地名は多いが、これらは植生地名として見るべきであり、色彩地名とは若干ニュアンスが異なる。今回とりあげた赤崎と赤迫の分布図を作ってみると、赤崎は赤石・赤岩と、赤迫は赤坂とほぼ同様の分布を示す。前者は岩石に、後者は土壌にその地形地名が由来するので、当然のことである。いつものように地名カードから地名例を拾いあげてみる。

赤崎(21例)——鹿児島市下福元・指宿市西方・頴娃町牧之内・頴娃町御領・枕崎市別府・東市来町湯田・里村里・東町川底・東町浦底・長島町平尾・三島村竹島・上屋久町口永良部・笠利町平・名瀬市朝仁・宇検村田検・宇検村部連・住用村見里・瀬戸内町油井・瀬戸内町篠川・瀬戸内町阿室釜・与論町麦屋

赤迫(21例)——鹿児島市下田・鹿児島市中・喜入町前之浜・指宿市十二町・笠沙町片浦・加世田市川畑・加世田市武田・加世田市小湊・吹上町永吉・阿久根市大川・阿久根市山下・薩摩町中津川・菱刈町荒田・横川町中ノ・牧園町中津川・垂水市高城・大根占町神川・大隅町大谷・大隅町月野・大崎町野方・上屋久町永田

どちらも21例だが、赤崎の三分の二は島嶼部の地名である。色彩・形状ともに海上ではよい目印になったのであろう。

ここで視点を変えてみる。電話帳を眺めると、赤石(明石)・赤岩・赤崎・赤瀬川などの名字は目につくが、赤坂は別として赤迫・赤土などは見当らない。泥くさい名字は嫌われたのだろうか。赤迫・赤土などは山裾に住む人々が日常耳にする地名だが、名字にまで成長することはなかったとみられる。赤土は作物を育てる土壌でないので、誇らしげに名乗る呼び名ではなかったのだろう。それに比べて赤崎・赤岩・赤瀬川などは海岸部でよく見かける地名であり、鹿児島県では名字としている人も多い。

ということは古来南九州の人々の活躍する場は海であったことを物語る。海幸山幸伝説では、弟山幸に屈服する兄海幸の子孫が古代の隼人だったという。鹿児島県の各地に散在する唐人町は、日本にある唐人町の半数を占める。十六世紀末から十七世紀初めにかけて海上交易で活躍した明の商人たちが南九州に住み着いて、視野の広い文化を育てたことに思いを至す時、赤崎という地名は海の道・海の文化の見直しをわれわれに示唆している。近い将来「われは海の子」の歌碑も建つそうだ。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (17)

色彩地名——青井

平田信芳

色彩地名に多い青・赤・白・黒は青竜(東)・朱雀(南)・白虎(西)・玄武(北)に結び付いている。都の占地に山・川・池・道などの配置を考え、「四神相応の地」とか「四禽図に合う」と判判する思想もそれにもとづく。青竜にサンズイを付けると「清滝」になるが、これは日光の「清滝」の名を有力大名が幕府に乞うて命名の許可を得た産物である。葵三代で江戸幕府の基礎が固まり、地名の命名でも幕府の鼻息をうかがっていたのが実態であった。

青春・朱夏・白秋・玄冬の表現も同類である。朱夏・玄冬はなじみが薄く、秋は北原白秋の占有物のようになり、青春だけが皆を楽しませている。横軸に青・赤・白・黒、縦軸に山・川・草・木の諸現象を配して該当する地名があれば○印を付ける一覧表を作ってみた。白・黒が断然多く、次いで赤。青はどん尻になる。青が得意になれるのは青息吐息・青びょうたんぐらいなものである。

青・赤・白・黒すべてに結び付くものは「木（青木・赤木・白木・黒木）」を初めとして、金・崎・瀬・田・豆・丸などである。青だけがないのは「石（赤石・白石・黒石）」・岩・川・坂・迫・谷・土・平などである。ただし、川・土以外は県外に地名例がある。青が目立つ地名例は青井・青島・青面などである。判り易いものから考察する。

青島と言えば宮崎県青島を思い付く。黒潮に乗って流れ着いた熱帯樹の自然林に覆われ、ビロウ樹・ヤシの樹などが一年中青々と繁っていることによると理解できる。同様に青々とした樹木で全島が覆われているのに鹿児島県鹿児島郡三島村の島の名は「黒島」である。視点の差で名前が異なるところが面白いとも言える。緑なす黒髪、青海原、黒潮など青と黒の差は文学的な表現の差とみてもよい。

青面はよく判らない。青面金剛像によったとも思えない。青井は何の変哲もなさそうだが、これもよく判らない。手がかりを得るために地名例をあげる。県内は次の四例のみ。

青井——大口市針持・上甑村平良

青井面——松山町新橋

青井野——吹上町与倉

赤井・黒井は県内にはないが、県外には地名例がある。泉が湧き出す所の石・岩の色彩によるのだろう。青井面は「青井免」の変形もしくは「青い面」だろうか。青井野もよく判らない。形容詞「青い」が地名に用いられたとすれば「青井」になるが、地名の研究はまだまだ未熟な青い段階である。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (18)

色彩地名――青　木

平田信芳

前回の「青井」は「葵」の紋への遠慮からかと思ったりもするが、現地で当っていないので余計な憶測は恐れ入ることにする。信仰の自由が保障された今日でも「筑紫の日向の橘の小戸の檍が原に坐しますイザナギの神」と神主さん達が抑揚のない声で祝詞（のりと）を読みあげるのを聞くと、神妙に玉串を捧げ、かしわ手を叩かねばならなくなる。これは神の国の慣習と割り切っている。しかし神社崇拝が衰退しつつある現在、ある人物のように村の鎮守を心の拠り所として精神生活の復興をはからねばとの立場で神の国を語り出すと話はややこしくなる。

そのことはとも角として、祝詞の常套文句「檍原」の檍（あわき）とは青木のことなんだそうだ。鹿児島県では神社の境内に行けば大抵の所で見られるし、山道を歩けば随所に自生していると知ったのは最近のことである。例によって地名カードを見ると意外に多い。以下、列挙する。

青木（8例）――鹿児島市山田・川内市山田・川内市百次・川内市西手・大口市青木・大口市曽木・垂水市中俣・鹿屋市花岡

青木平（4例）――鹿児島市小山田・鹿児島市中・指宿市西方・頴娃町郡

青木本（3例）――喜入町前之浜・枕崎市西鹿籠・吹上町永吉

以下は各1例。青木ヶ迫（鹿児島市小山田）、青木ヶ島（大口市里）、青木ヶ谷（指宿市十二町）、青木原（頴娃町別府）、青木ヶ丸（鹿児島市郡元）、青木道下（頴娃町別府）、青木森（鹿児島市下伊敷）

地名を見る限り、青木（檍）が生育しているのは水気のある所のようだ。青木は葉が大きく艶があって部厚く水々しく、手の平に載せて食物を受け取るのに格好の大きさである。しかし、やや毒々しくこのような葉を食べる気にはならない。桜や柏の葉は薄くて軟かく、やや渋い色で艶やかな餅を包むのには適している。昔の人々は、食べる材料・食物を載せる材料と、実態に応じて使い分けていたようだ。現在は木器・金属器・陶磁器・ガラス・プラスチック・箱詰・缶詰・瓶詰等々、手変え品替えの容器で飲物・食物が供されているが、原始的な食事のとり方を追体験してみるのも、たまには必要なようだ。上野原・大隅国分寺跡・隼人城跡などがそれを試みる場になれば、歴史の古い町国分もちょっぴりは見直されるに違いない。青木（檍）は良い意味の歴史の見直しを語りかけている。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (19)

色彩地名――青　戸

平田信芳

知覧から開聞、指宿へ向う時、霜除けの風車が林立する茶畑の展開に見とれる。特に青戸付近の茶畑はみごとである。いわゆる頴娃茶の産地である。ある時、頴娃町に青戸という所があるが、青戸の意味は？と聞かれた。青砥に由来するのだろうと答えたら、砥石の話は聞いたことがないとのことで、首をひねりながらも二十数年来そのままにして来た。今回、色彩地名「青」をとりあげたので青戸」と対決せざるを得なくなった。

青戸という地名は県下では頴娃町にあることしか気付いていない。頴娃町の小字に青戸○○がずらりと並ぶ。頴娃町の地名は一つの地名から派生するものが多いのが特色である。

青戸原・下青戸原(御領)。

青戸道瀬（別府）。

青戸原・青戸道上・青戸道下・青戸中村・青戸上園・青戸境・青戸内西下・青戸内東下・青戸内東上・青戸内上西(上別府)。

頴娃町の青戸は『鹿児島県地名大辞典』（角川）には立項されていないが、東京・神奈川・京都・福井の地名大辞典には青戸・青砥が収録されていた。東京都葛飾区青戸町と横浜市緑区青砥は鎌倉時代の有名人「青砥左衛門尉藤綱」の居住地に由来しているとのこと。京都府船井郡八木町青戸は15世紀の文書に「青砥」と見え、福井県大飯郡高浜町の「青戸の入江」は別名「硯の海」とのこと。当然「青砥」も産出したとみられる。これらはすべて「青砥」に結び付いて来る。

これらの地域に共通するものは何かを考えると、相州物・京鍛冶の名で知られる日本刀の産地が近いことに気付く。薩摩国にも「波之平」で知られる古刀がある。近くに刀工が納得する砥石の産地が必要なのだ。青戸という地名は刀鍛冶・砥石に結び付くようだ。

小学・中学時代、いろんな砥石の世話になった。赤く錆びついた肥後守を先ず粗砥（あらと）で研ぐと、赤茶けた酸化鉄が水に溶け出して来る。毒々しい色である。中砥（なかと）に切り換えると研ぎ汁はねずみ色に、仕上砥に移ると緑がかった色になる。これが青砥の由来だろう。冬はスケートの刃を毎日研いだ。油砥石で研がなければ氷の上を滑れないからである。緑がかったねずみ色に変る油の色を確かめ、親指で研いだ歯の切れ味を試めす手入れは楽しい日課だった。

古代の隼人は鉄器を多く用いていた。砥石の視点から歴史を見直すことも必要のようだ。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

自然現象にもとづく地名 (20)

色彩地名――青竜と清滝

平田 信芳

「青」を終るに当って青竜と清滝の補足説明をしておきたい。(17)で青竜にサンズイを付けると「清滝」になる、日光の清滝の名を有力大名が幕府の許可を得て命名したと述べたが、テレビで大相撲名古屋場所の土俵を漫然と見ている時に、東側に緑の房が掛かっているのに気付いた。これが青房なのである。赤房・白房・黒房は常識的な色。古来、日本では青木・青草・青葉・青野菜・青山・青島など緑色のものをすべて「青」と理解して来た。八月初めの文化財研修講座ではこのことを話した後に「清滝」の説明に移った。

鹿児島市の清滝川の名はいつから登場するのか。明治三十年吉田書店発行の地図には清滝川の名が見えるが、三国名勝図会に見当らない(実はある)。『大石兵六夢物語』を著した毛利正直(一七六一～一八〇三)が『大福辨夢中小槌後』の中に「清滝川の清き流れ古くしみこみたる心の……」と書いているので、十八世紀末にはその名があったと思われる。当時の殿様は島津重豪。幕府の許可を得て名付けた可能性が大きい、と。

全国的に眺めると清滝は18か所ほどある。それぞれの由来を要約すると、①弘法大師空海に結び付く、②清滝神社・清滝寺に由来する、③滝が多く清流である。④修験修行の場であった、⑤清水滝の省略、⑥清水と赤滝から一字ずつ採った複合地名、⑦滝の名が清滝。解釈もいろいろあるものだと妙に感心する。

空海が唐都長安の青竜寺で修行し、その鎮守神青竜を日本に勧請、はるばる海を渡って来たのでサンズイを付けたという(日本地名ルーツ辞典)京都の清滝が始まりで、後に日光に移り、さらに滝が多く清流が流れる所に根着き、密教修行の場になったとみられる。こういう条件を考えると鹿児島の清滝川は命名の動機がどうもうさん臭い。

文化財講座から二日後、話を聞いていた江平望氏から『知覧文化』第二十六号の抜刷が送られて来た。三国名勝図会の神月川(甲突川)の項に清滝川の説明がある、明和七年(一七七〇)の『盛香集』には「とひの口溝」という清滝川の古名が出て来ると。いつ頃から清滝川名が付いたか不明だが、松林の続いた南林寺海岸に流れていたから「清滝や波に散りこむ青松葉」(芭蕉)の句にもとづいての命名ではないか、芭蕉塚も残っている、と。俳人たちの命名としたら歌枕を多く紹介している『麑藩名勝考』(一七九五)に「清滝」が見えてもよさそうだが。〔鹿児島地名研究会世話役〕

◎奄美の地名へのお答え。

奄美の地名についてもカードを半分ほど作りかけているのですが、この三年間忙しい仕事で中断を余儀なくされています。琉球方言群・奄美方言群は独特な地域性を持つので「島口」をよく知る人に聞いて取り組むつもりではいます。奄美についての一般的情報は『沖縄大百科事典』が多く提供してくれるようです。地名カードをすべて作りあげる過程で奄美の地名への切り口も見えるだろうと考えています。(平田)

自然現象にもとづく地名 (21)

色彩地名――白石・白岩

平田信芳

白い岩石に由来する地名。鹿児島県ではすべて「しらいし・しらいわ」。『日本地名総覧』(角川)に掲載されているものを整理してみた。「しろいし」と読むのは宮城・群馬・佐賀の3県。「しらいし」と読むのは千葉・神奈川・愛知・岐阜・三重・京都・奈良・鳥取・岡山・広島・山口・徳島・愛媛・高知・福岡・鹿児島の16県。両者混在が北海道・福島・埼玉・富山・長崎・熊本の6県になる。混在型はしろいし型に接する地域であり、その影響を受けたとみられる。圧倒的に多い「しらいし」が基底をなす表現であり、「しろいし」は外来文化などの影響を受けて発生した二次的表現とみてよいだろう。

私の地名カードにある県内の「白石」地名は次の20例。北から順にあげる。

白石――高尾野町江内・宮之城町柊野・同舟木・樋脇町市比野・川内市田崎・同高江・同寄田・郡山町厚地・松元町春山・日吉町日置・加世田市津貫・頴娃町上別府・開聞町十町・垂水市牛根麓・同新城・宇検村佐念・和泊町国頭・知名町田皆・同赤嶺・与論町立長

宇検村以下奄美の知名は「シャアシ」と発音するらしい。珊瑚が形づくった石灰岩で、トラバーチンと呼ばれる有用な石材。南国の太陽に照り映える文字通りの白い岩石である。

鹿児島県本土は大半がシラスで覆われ、その下に白い珪藻土・珪石の層が残る所もあるが、ほとんどがシラスより凝結度が高い溶結凝灰岩である。いわゆる火砕流が固まったもので、中世以来反田土石(たんたどいし)・桃木野石・二瀬戸石・小野石などの名で土木用材として用いられて来たが、二瀬戸(ふたせど)石以外は白石と呼ばれることはない。溶結凝灰岩の下に安山岩が層を成す。これは板状に平たく割れる特質があり、南九州古墳時代の墓制「地下式石積石室」の石材として用いられた。古代隼人たちの墓とみなしてよく、色は黒褐色である。

白石と呼ばれるものは花崗岩や石英が母岩になる。玄武岩と呼ばれる深成岩は安山岩よりさらに深い所で層をなし、地上で見られることは少ない。花崗岩や石英が露出する所でなければ白石・白岩の地名は命名されないし、露出していても人が近付けない所であれば地名に名付けられることもない。ものはついで「白岩」地名をあげておく。

白岩(5例)――東町山門野・宮之城町泊野・同山崎・樋脇町塔之原・隼人町松永。

東町と隼人町のものは「シライワ」のルビがある。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (22)

色彩地名――白銀坂

平田信芳

歴史の道百選に選ばれ、史跡整備計画が進んでいる「白銀坂」については、拙著『地名が語る鹿児島の歴史』で、地元での読み「しらかねざか」ではなく「しろがねざか」と読むべきことを述べた。その論拠は五百年ほど前に書かれた「平松水田坪付帳」（入来文書）に「しろかね・しろかねの口・しろかね田」などと記されているからである。地元で「しらかね」と根づいてしまっているものは、容易に修正が利かない。地名の読みは地元での読みを重視するのが基本だが、どのようにして「しらかね」に変ったのかを証明しなければならないと考えあぐねて来た。

古い旅行記・地誌などにルビを振ったものがないかと気を付けているが、仲々めぐり逢えない。ようやく出合ったのが明治三十一年（一八九八）刊行の『薩摩日地理纂考』であった。十九世紀の時点で「しらかね」の読みがあったと見るべきか、この時点で「しらかね」のルビが与えられたと見るべきか、いずれかであろう。私は十九世紀末にルビが与えられたのではないかと考える。

島津氏は鶴丸城を築くまでは内城（鹿児島市大竜小学校の地に所在）を拠点とした。郷土史の類をひもとくと、これも「うちじょう」「うちしろ」とルビが二通りあって混乱している。平城・内城の場合、苗字では「ひらじょう」「うちじょう」と読む。「うちしろ」の読みは知らない。『薩隅日地理纂考』に「ウチシロ」のルビがあり、根源はここにあると思った。

シラカ子・ウチシロ。幕末～明治初期の国粋主義的な学者たちが音訓混合の読みを嫌い、古くからのヤマト言葉を用いようとした教育政策のもとにそのような読みを根づかせたのであろう。こがね（くがね）・しろがね・あかがね・あおがね・はがね・まがね・くろがね等々、金属の呼び名からは「しろがね」が常識的であり、「しらかね」は強引な読みである。

県内には姶良町脇元の「白金」の他に、加世田市津貫と出水市上鯖渕に「白金」という地名があるが、読みは未確認。薩摩町中津川のものは「しろかね」。長島町の白金崎古墳は「しろがねざき」と「しらかねざき」二通りのルビがある。地元でも混乱しているのだろう。白銀坂は「銀＝シルバー」にもとづいた命名でないので色彩地名とみる必要はないが、文字面からは「銀」と遊離するわけにはいかないので取りあげた次第である。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (23)

色彩地名――白川

平田信芳

短歌・俳句に興味をもつ人は多い。NHKも歌人・俳人を複数の人数を集めて相互評価・解説を行なう教養番組を始めた。南日本新聞が紹介する郷土雑誌の欄も、ほとんどが俳句・短歌の類である。それらに比べると、地名などに取り付いてひねくり回しているのは変り種と自他ともに認めざるを得ない存在なのだろう。独り孤高を保つ、ゴーイング・マイ・ウェイという気負いなどさらさらないが、やはり少数派の淋しさを否応なしに感じさせられる。国分高校図書館にあった山口誓子の色紙「老いてゆくさびしさに堪へ炭をつぐ」を最近は身にしみてなるほどと感じるようになった。ただし句の始まりが「老いてゆく」だったか「老の身の」だったか「学問の」だったか、さだかでない。それを確かめに行くほど俳句を重要視していない。星浪さんに電話すれば解決することかも知れないが、それほどの熱心さもない。いい加減な記憶であることについてはご寛容を乞う。

さて表題の白川に入ろう。白河も白川も語学的には意味は同じ。白河の方は後白河法皇・白河関・白河夜船などで歴史的・文学的な題材として用いられるが、白川の登場はほとんどない。白河にせよ白川にせよ、河床に小石が敷きつめられ、きれいな水が流れている川とみなしてよい。清川・黒川などの表現があることを考えると、基盤となる岩盤が石灰岩や玄武岩などの白い色が主体となる岩石でなければならない。このように理屈っぽく考えるから人々は尻込みするのだろう。

鹿児島県の「白川」地名を北から順に列挙してみる。

白川(7例)――菱刈町川南・金峰町白川・知覧町郡・頴娃町郡・上屋久町一湊・上屋久町吉田・名瀬市有屋

名瀬市は隆起珊瑚礁が形作るトラバーチンと呼ばれる石灰岩を、菱刈町は金鉱脈を含む花崗岩を、屋久島も花崗岩を基盤としている。基盤の岩石から考えると、「白川」という川の名は当然の命名だと分析出来る。また、これらの地名はすべて「しらかわ」。「しろかわ」と読む例は寡聞にして知らない。ということは「しら」が古来からの表現、すなわち日本語の基礎的な発音であり、「しろ」は外来的要素が加わってからの発音になる。白砂糖などは外来のものであることを端的に物語っている。人生なるようにしかならない。気張ってみても仕様がない。すべては白河夜船の気分でいたい。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (24)

平田信芳

色彩地名――白木

日本古来の色彩感覚である赤・青・白・黒と「木」が結び付いた表現として赤木・青木・白木・黒木がある。赤木は染料として用いられ、青木は緑濃い「檍」を指す。白木は樹皮を剥ぎ削った状態すなわち生地のままを指し、黒木は皮つきの状態をいう。しかし白木・白木〇〇という地名は意外に多く、まず全国分布を眺めた後に鹿児島県の「白木」地名を考察することにした(角川地名辞典による)。

白木(しらき)――千葉・新潟・石川・福井・岐阜・三重・奈良・大阪・広島・高知・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・鹿児島

白木(しろき)――秋田・山形・山梨

白木〇〇(白木崎・白木峠・白木原など)――岩手・福井・岐阜・滋賀・三重・高知・山口・福岡・佐賀・熊本・大分・鹿児島

一見して九州各県に集中していることが判る。読み方を色分けすると、東北は「しろき」、関東甲信越は混在地帯、西日本は「しらき」地域と分類することが出来る。このように分けられるということは、白木が「塗料を塗らない生地のままの木」に由来するものでないことを示す。白樺や白樫は幹の色によって名付けられたもので、しかも固有名詞になっているから、その昔「白木」と呼ばれた樹木があり、その植生によって名付けられた呼び名との見当が付く。

次に県内の「白木」地名を拾い出してみた。

白木――大口市の大字・鹿屋市永小原・瀬戸内町押角

白木元――阿久根市脇本・長島町指江・串木野市羽島・串木野市上名

白木原――川内市東手・串木野市上名・長島町平尾。

以下は各一例。

白木山(鹿児島市皆与志)・白木瀬戸(鹿児島市皆与志)・白木河内(鹿児島市下福元)・白木川原(阿久根市鶴川内)・白木尾(阿久根市赤瀬川)・白木石(大口市白木)・白木迫(串木野市下名)・白木平(串木野市羽島)・白木野(中種子町坂井)・白木峯(南種子町茎永)・白木牟田(知覧町西元)

最後の白木牟田だけがシロキムタのルビがあるが、他はほとんどがシラキである。県内の「白木」地名を見ても容易に植生地名だなと見当が付く。『草木名彙辞典』(柏書房)を見ると、シラキ「トウダイグサ科の落葉小高木。別名、赤綟(ねじ)・油木・岩櫨・白肌・波羅得(はらとく)・こくどのかし。ほるとの木の別称。用途は燈用・塗料・髪油、細工・薪炭の用材」とある。利用価値の高い木だった。

自然現象にもとづく地名 (25)

色彩地名――白崩

平田信芳

浸食もしくは崩壊にもとづいて生まれた地名の一つに「崩(くえ)」が付くものがある。崩石・崩岡・崩谷・崩段・崩平・崩山・崩上・崩下・大崩・崩頭・崩尻・崩迫・崩元など変化形も多い。火山地帯では常に災害と隣り合わせており、災害を恐れ警戒する意味で名付けられた地形地名とみてよい。「崩」地名の中で色彩地名と結び付くのは赤崩と白崩。県内では赤崩6例に対し白崩は20例を数える。赤崩は散在してまとまりがないが、白崩は①北薩の紫尾山周辺、②南薩の開聞岳縁辺部、③大隅半島南部、④種子島の四地域に分けて眺めることが出来る。

①グループ――阿久根市波留・川内市城上・川内市田海・宮之城町泊野・鶴田町鶴田・鶴田町神子・菱刈町前目・溝辺町有川

②グループ――指宿市十二町・頴娃町牧之内・頴娃町別府・川辺町本別府

③グループ――鹿屋市花岡・串良町細山田・根占町川南・田代町麓

④グループ――西之表市西之表・西之表市伊関・中種子町油久・南種子町茎永

赤崩(あかくえ)は浸食・崩壊によって赤ホヤ層が露出したことによる命名と考えられるが、白崩(しらくえ)の正体が何になるのか未確認。フィールドワーク不足は否めない。深成岩である花崗岩が浸食・崩壊によって露出することは少ないとみられるし、シラス台地の崩壊部分に名付けられる名称であれば県下の随所で見られるはずである。したがってシラス地形の名称ではない。考えられるのは珪藻土・珪石・珪岩の類である。珪岩の中には動植物の化石が見られることがあり、化石探しの面で宣伝されると思う。珪藻土や珪石は陶土として目を付けられる。白崩とか白坂という地名の分布図を作成して焼物作りの場所を考えることも陶芸家には必要ではないのかと言いたいのだが、現実はそんな悠長なことを言っている暇はなさそうだ。

良質の珪藻土はカオリンと呼ばれ、焼物の原料としてでなく真っ白な光沢のある上質紙を作るために、大企業によって山ごと根こそぎ掻き集められているのが現実である。上質紙をふんだんに用いカラー写真で埋め尽くしたグラビア紙の印刷物が書店に数多く展示されているが、そのうち日本のカオリンは底をつくのではないかと心配する。「白崩」を考えながら余計な心配もせざるを得ない。老齢の域に入った所為だろう。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (26)

色彩地名――白坂

平田信芳

「赤坂」をテーマとした時に、青坂・黒坂にも触れた。青坂は皆無、黒坂は県内で二例だけ。鹿屋市と菱刈町にある。桜島もしくは霧島の黒色火山灰にもとづくとみられる。赤坂は赤ホヤと呼ばれる六千三百年前の鬼界カルデラの噴出物が分厚く堆積している土地だから、県内各地に赤坂という地名が数多く見られるのは当然である。

「白坂」は前回とりあげた白崩よりも数が多く、しかも地域的に偏在してみられる地名である。ある地域に集中すること自体にその地名が生まれる背景があることを示している。「白坂」地名は①薩摩郡、日置郡北部、②錦江湾岸、③霧島山周辺、④南薩、の四グループに分けて眺めることが出来る。読みはすべて「シラサカ」である。

①グループ――川内市平佐・串木野市冠岳・東郷町南瀬・樋脇町塔之原・宮之城町久富木・市来町大里・東市来町湯田・東市来町伊作田・伊集院町下神殿・伊集院町古城・日吉町吉利・鹿児島市小山田・下甑村青瀬

②グループ――鹿児島市平川・喜入町中名・喜入町前之浜・垂水市市木・垂水市新城・鹿屋市船間町

③グループ――菱刈町前目・姶良町北山・隼人町松永・財部町南俣・末吉町二之方・松山町泰野

④グループ――笠沙町片浦・大浦町大浦・頴娃町別府

鹿児島県本土の大半を覆って独特な地形を形成しているシラスは、色彩地名とほとんどかかわりがない。シラスすなわち入戸火砕流が堆積する年代は約二万二千年前～約一万一千年前、赤坂・赤迫などの地名を生み出す赤ホヤの堆積は約六千三百年前になる。白坂・白崩などの地名を生み出す地層は、その中間の年代になるのではないだろうか。というのは平佐・南瀬・塔之原・大里・湯田・伊作田・吉利などは海岸段丘・河岸段丘近くに立地しており、一万一千年前～六千三百年前の頃、池・沼などが多く見られる湿地帯であったに違いないと思うからである。そのような湿地帯に生息した珪藻類が堆積すると珪藻土が作られて「白坂」地名が生まれるもとになるだろう。珪藻土・珪石・珪岩の年代が数十万年前という数値だとしたら、それはそれなりに古生物を考える一つの材料になるだろう。文科マンが理科マンの分野にしゃしゃり出るのは禁物。昔から餅は餅屋にまかせろという。この辺で白坂から撤退するのが懸命だろう。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (27)

色彩地名――黒石と黒岩

平田信芳

黒石と白石。ほとんどの人が碁石を連想するだろう。私は碁をしないから、江戸時代盛んに用いられた加治木産の黒石と白石を連想する。こんなのは例外中の例外、俗にいうへそ曲がりの発想である。加治木石と呼ばれたものは二通りあって、桃木野石(桃木野産の溶結凝灰岩)を黒石、二瀬戸石を白石と呼んだという。黒石は墓石に、白石は石垣に主として用いられた。

しかし鹿児島県内の黒石・黒岩地名をリストアップしてみると、溶結凝灰岩よりも下層の固い安山岩質の石・岩に名付けられた地名ばかりである。しかも人々が石材として利用したものでなく、その土地の目印となる石・岩に名付けられた地名とみなされる。地名カードから拾い出してみると、黒石・黒岩ともに次の三グループに類別出来る。Ⓐ鹿児島湾沿岸部、Ⓑ薩摩半島脊梁部、Ⓒ離島部である。

黒石Ⓐ――国分市川原、垂水市牛根麓・同新域、喜入町瀬々串・同中名

黒石Ⓑ――出水市武本・頴娃町上別府・開聞町十町

黒石Ⓒ――西之表市伊関・同古田、和泊町国頭

黒岩Ⓐ――鹿児島市下田・同皆与志・同岡之原・同伊敷・同中・同下福元・同平川、指宿市東方、垂水市牛根麓・同新域、鹿屋市郷之原・同天神、根占町辺田

黒岩Ⓑ――大口市太田・同篠原、薩摩町中津川、樋脇町塔之原、川内市網津、市来町川上、東市来町長里、郡山町郡山、吹上町小野・同田尻・同入来、笠沙町片浦、加世田市小湊・同内山田、頴娃町郡

黒岩Ⓒ――上甑忖中甑、上屋久町宮之浦・同楠川

さて、これらのうち利用されたのは盆石趣味流行で一時珍重された伊集院町神之川産の宮田石ぐらいのものだろう。死んだ親父が拾って来た宮田石が残っているが、磨いて飾る趣味もなく、女房殿が漬物石として適当に使っている。盆石ならばやや芸術的・趣味的なのだろうが、そんなものよりも漬物石の方が実用的でよい。また、考古学の世界で考古学者が目の色を変えて探し求めている黒耀石の産地は、どうしたことか「黒石」地名とは結び付かない。黒くあやしく輝くのが本来の「耀」の意味なのだが、最近では「黒曜石」と書かれて、さかんに神の手による捏造か?と騒がれる。土曜・日曜の読み物にされている感じさえする。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (28)

色彩地名――黒神

平田信芳

桜島の黒神には大正三年の噴火時に埋まった腹五社神社の鳥居がある。その鳥居で有名だが、類例の少ない地名である。十数年前、筑波大学の女子学生から電話があり、黒神の由来はと尋ねられた。黒髪はいくつかあるが黒神は知らないと答えざるを得なかった。以来気にはなっていたが、怪力乱神を語らずと漢文で習った後、断じて行えば鬼神も之を避くと配属将校から気合を入れられ、天皇陛下のために死ねば靖国の神と祀られる等々、思考力を停止させられた世代としては「神」が付く地名には近付きにくいものを感じる。

「黒」をテーマとした以上、黒神を避けるわけにはいかない。愛媛県の剣山に黒神という地名があるらしいが、日本地名大辞典には項目としてあがっていない。県内では阿久根市波留に黒上田という類似地名が一例ある。黒神は江戸時代には黒上村とも書かれたので似てはいるが、これだけの例では手がかりにならない。

色を冠する神として黒神と白神はあるが、赤神・青神は聞かない。赤と青は鬼に付く。しかし白鬼・黒鬼の存在は知らない。桃太郎が行った鬼ヶ島は有名だが、「小字一覧」を見ると「鬼」の付く地名は島だけでない。鬼ヶ宇都・鬼木場・鬼ヶ迫・鬼ヶ瀬・鬼ヶ谷・鬼塚・鬼辻・鬼ヶ野・鬼原・鬼ヶ平・鬼ヶ峯・鬼山等々、昔は集落から一歩外に出ると鬼の存在を思わせる地名がわんさとあった。村人はそこに青鬼・赤鬼がいると信じたのである。鬼を引き合いに出しても黒神の説明は得られないので、同音の黒髪と比較してみた。

黒髪町。熊本市・佐世保市にあり、黒髪神社に由来する。**黒髪山**。熊本県・佐賀県・岡山県・栃木県にある。黒髪権現・黒髪神などが祀られ平安・鎌倉期以来、修験道の道場であった。**黒髪島**。山口県にある。江戸時代は黒神島と呼ばれた。黒神石、別名徳山石の産地として著名。徳山石(黒神石)として知られる花崗岩は皇居や国会議事堂の石材に用いられている。

黒髪という地名は古くは山岳仏教の道場として、近くは皇居・国会議事堂の用材の産地として、どちらも恐れ多い所である。黒髪島が黒神島とも書かれたことと、黒髪山が修験道の修行の場であったことは納得したが、桜島の黒神の由来はやはり判らない。黒髪が黒神に転化したことが史料的にはっきりすればよいのだが。さらに女性の黒髪の力の大きさと結び付けば、歴史が楽しくなるのだが。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (29)

色彩地名――黒木

平田信芳

木材利用の際、木の皮を剥げば白木、皮つきのままだと黒木と表現する。地名の場合は「黒木」という樹木の植生にもとづく。『草木名彙辞典』によると、柾(まさき)・白檜(しろひのき)を指すとのことだが、何故黒木と名付けられたのかよく判らない。全く以って漢字に振り回された感じ。それはとも角、私の地名カードにある県内の「黒木」地名を次に掲げる。

黒木――祁答院町の大字・鹿児島市黒神町
黒木山――鹿屋市新生町・垂水市田神・市来町大里
黒木迫――指宿市池田
黒木田――南種子町中之上
黒木野――垂水市新城
黒木原――鹿屋市川東町
黒木ノ元――出水市下知識

祁答院町黒木は、昔は黒木郷と呼ばれ、江戸時代は黒木島津家の領地であった。今は消滅してしまったが、その昔の鴨池動物園一帯は黒木島津家の別荘があった所。後に島津本家の鴨猟場となって「鴨池」の名が生まれた。そのような歴史も忘却の彼方へと去った。

宮崎県の電話帳を調べていないので具体的に数値をあげられないが、黒木・日高・甲斐などは宮崎県のどこへ行っても出合う名字である。第二次対戦敗北後、都市への人口集中に拍車がかかり、県庁所在地にはその県のすべての名字が集住して本貫がどこなのか判らなくなりつつあるが、過疎地になった地域の電話帳などを見るとその土地に密着した在地性の強い名字がずらりと並んでおり、地名や名字を研究する者にとっては楽しい素材がいくらでも目につく。

従来、地名や名字ではその語源・由来を考えることに人々の眼は向いていたが、私は地名や名字が昔のままの言葉で呼びかけている未解明の歴史を把握すべきだと考えている。考古学者はものを言わぬ石器・土器・木器などを基に古代の社会、文化を理解しようと努める。人々は遺物が発するもの珍しさに幻惑されて興味を示す。地名や名字は石器・土器・木器以上に昔を物語る素材であるが、その中に秘められている歴史に人々は一向に気付かない。地名はあまり動かないが、名字は人の流れと共に移動する。しかし名字は決して根なし草ではない。それぞれの名字はみな拠り処を持っており、また日本全体の歴史と深く関わっている。黒木姓が宮崎県に多いという視点だけでは済まない内容を秘めている。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (30)

色彩地名――黒須と久留須

平田信芳

鹿児島県の自然景観はシラス台地・シラス浸食谷・シラス低地によって大半が形成されている。シラスに漢字を当てるとすると白洲(白砂)を思いつく。反対語を尋ねる人はまずいないが、クロスと見当をつけてよい。黒須・黒巣・黒之砂などの地名が少数例ではあるが散見する。黒須(菱刈町川北・菱刈町前目・川辺町野間・喜入町中名・隼人町嘉例川・牧園町万膳)、黒巣(牧園町三体堂・福山町佳例川)、黒ス原(金峰町白川)、高畔須(吹上町永吉)、黒之砂(枕崎市別府)などがある。

よく似た地名にクルス(栗栖・久留須・久留主)がある。県内ではクロスの4倍程あり、よく知られた地名でもある。織田信長を倒した明智光秀が小栗栖で土民の竹槍に刺されて最後を遂げるので歴史的にも有名である。竹槍戦術が効を奏したのはこの時ぐらいだろう。

栗栖(川辺町神殿)、小栗栖(川辺町清水)

栗須(鹿屋市祓川・吾平町麓・串良町細山田・財部町北俣・同下財部、松山町新橋)

小栗巣(大口市曽木)

久留須(鹿児島市犬迫・同西別府・大口市針持・栗野町米永・同木場・鶴田町柏原・同紫尾・東郷町斧渕・同藤川)

久留巣(川内市五代・同田海)

久留主(川内市中郷・入来町浦之名・祁答院町下手・樋脇町市比野)

小久留守(宮之城町久富木)

クルス(川辺町清水・牧園町持松・福山町福沢・輝北町諏訪原)、ウグルス(宮之城町平川)、小グルス(川辺町古殿)、横グルス(桜島町松浦)

上ぐるす・下ぐるす(加世田市武田)

地名辞典類をひもとくと、礫洲(クリス。グリイシ混りの砂)、刳洲(クリス。えぐられ易い砂洲)、栗栖は国栖と同じ意味で国主(クニヌシ)の居住する土地の意などと各種各様の解釈がなされ、難解地名の一つとされている。

上記の地名を白地図上に落としてみると、クロスもクルスも大体同一地域に分布することが判る。ということは語源は同じとの見当がつく。三母音時代のU音・O音の関係を考え、ウグルス(大グルス)・オグルス(小グルス)などの地名があることを考えると、クルスはクロスより古い形の表現と解釈してよい。黒い砂にもとづく地名だったのである。黒い砂は砂鉄を多く含んでいたのだろう。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (31)

色彩地名――黒瀬・黒瀬戸

平田信芳

「黒」が付く語句を気分で分けてみよう。好感が持てるのは黒髪・くろがね・黒砂糖・黒字・黒潮・黒土。何となく不気味な存在が黒子・黒瀬・黒瀬戸・黒浜・黒星・黒幕・黒枠・腹黒と云ったところか。黒石・黒岩・黒木・黒島・黒鳥・黒松などはその中間。主題とした黒瀬・黒瀬戸は大半が海岸地帯にあるが、内陸でも若干みられる。以下は県内の地名例。

黒瀬――垂水市柊原・大根占町神川・開聞町十町・三島村片泊・笠沙町赤生木・同町片浦・吹上町永吉・長島町平尾・樋脇町塔之原・姶良町上名

黒瀬戸――蒲生町下久徳・同町米丸・郡山町川田・阿久根市黒之浜

海岸部にある黒瀬・黒瀬戸は岸を離れるとすぐに深くなる所が多い。内陸部の場合は広葉樹が生い茂り、日当りの悪い瀬・瀬戸に名付けられている。鹿児島県は離島が多く、鹿児島湾を出るとすばらしい海の色を楽しめる。甑島・種子島・屋久島などへ、ちょっとした船旅に出かけるのも気分転換によい。

船旅に出かける暇がなければ、長島と阿久根市黒之浜の間に架かる黒之瀬戸大橋から潮流を見おろす代替案がある。

隼人の薩摩の迫門を雲居なす
遠くもわれは今日見つるかも
（万葉集　二四八）

隼人の湍門の磐も年魚走る
吉野の瀧になほ及かずけり
（万葉集　九六〇）

昔は渡し船があったが、現在は橋が架かり歩いて渡れるようになった。西方の岸には黒之瀬戸で育った活きのよい魚を食わせる店もあるのだが、訪れる人は少ない。隼人の瀬戸・薩摩の瀬戸と万葉集に詠まれた景勝の地があるのだが、人々が不勉強なのか、地元の宣伝がへたなのか、意外に知られていない。やがて新幹線開通・西鹿児島駅の改名・鹿児島本線の第三セクター化問題とお祭り騒ぎに近い。阿久根市の海岸・黒之瀬戸海峡一帯の景観は見捨てたものでない。在来線の見直しがいつかはやって来る。

少々方針を変えて長島―天草―島原半島を繋ぐ路線を開通させたら、鹿児島から長崎やハウステンボスに遊びに行き易くなる。本州・四国間に三本の大橋を架けるよりも技術的にも経済効率的にもはるかに気がきいている。鹿児島本線第三セクター化は棚上げにして、九州外回り架橋を騒ぎ立てるのは如何でしょうか。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (32)

色彩地名――黒鳥と白鳥

平田信芳

バードウォッチングの趣味はない。鳥の名を実体共に知っているのは指折り数えられる程度。日常近くで見かけるのは烏・雀・燕・鳶・隼・鵜・カモメ・ウグイス・目白・鷺・鴨・オシドリ・千鳥・コマドリ・セキレイ・ニワトリ・アヒルなど。他は動物園で眺めての知識である。孫たちとの夏休みの一日、上野動物園で遊んだ。孫たちの眼は猛獣の眼より光っていた。「遊びながら学ぶ」のが学習の真髄と知る。退職教師が10年以上経ってからの実感。テンポのずれも甚しい。

主題とした黒鳥と白鳥は北国からの渡り鳥。鹿児島県では滅多に見かけるものではない。そのために黒鳥・白鳥を見た時には眼を輝かしてその場所の呼び名としたに違いない。以下県内の関連地名を列挙する。

黒鳥――川辺町野間・末吉町二之方

黒鳥川――出水市下知識・南種子町西之

黒鳥迫――末吉町岩崎

白鳥――国分市川原・南種子町島間

一見しての通り、末吉町とか南種子町など俗世間の人々が立寄らないような地域に、冬鳥は静かに渡って来たと理解出来る。人目につかないのだろう。数的には少ない。ところで、有名な所が一つ脱落している。お気付きかな。それは霧島火山群の一つ、白鳥岳である。宮崎県えびの市所属なので一応遠慮したが、登場を願わなければ原稿用紙の穴埋めは不可能と悟った。そこには白鳥神社もある。祭神は日本武尊。若い世代は「ヤマトタケルノミコト」の読みを知らないので、「新しい歴史教科書」は日本武尊を読みものとして登場させた。日本武尊が白鳥伝説と結び付くのはよいのだが、妃の弟橘媛(オトタチバナヒメ)が荒れ狂う走水の海で海神の怒りを鎮めることを夫の身代わりに願って入水した婦徳を賞賛するのは女性蔑視の発想と才女たちの柳眉を逆立てさせた。そのことは別にしても「南九州南部には熊襲または隼人とよばれる人々がいて、古くから大和朝廷に服従しなかった」の説明は頂けない。7~8世紀の頃、熊襲は存在していない。お粗末というしかない。

白鳥岳の火口湖である白紫池のほとりを歩く時、此処にも白鳥が渡って来たのだろうと連想する。そして口ずさむのは「白鳥は哀しからずや空の青、海の青にも染まず漂う」。「黒鳥」を掲げながら、白鳥の説明に終始した。黒鳥の情報をほとんど知らないからである。羊頭狗肉ならぬ黒鳥白鳥の一節となった。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (33)

海辺の地名――「磯」

平田信芳

鹿児島県96市町村のうち、海岸線がないのは1市28町。約30％の自治体が海に面していない。裏返しに云うと約70％の自治体が海に面していることになるのだが、日常見なれているためか、それとも狭い陸地を少しでも拡げようとの欲望があるためか、海辺や海上にやたらと小ざかしい構築物を造成することに行政当局は熱心である。そうすることが近代都市づくり・町づくりと勘違いしている向きがなきにしもあらず。テトラポットで海岸線を埋め尽くし、人々から魚釣り・浜遊びの場を取りあげてしまった。干潟を干拓してはノリ養殖に打撃を与え、海砂をとっては台風のたびに浜がけを出現させている。

見とれていても飽きが来ない景観のためか、地名カードをめくって見ても海辺の地名は意外に少ない。ご先祖さま達はわだつみの神の怒りを恐れて、名前を付けるのを手控えたのかも知れない。荒れて行く海辺を見直す一助にもなればと考え、「海辺の地名」を眺めることにした。鹿児島県地名大辞典（角川）の小字一覧にある「磯」地名は以下の通り。

磯（鹿児島市吉野町・同桜島・指宿市小牧・垂水市牛根麓・同二川・同牛根境）

荒磯（指宿市西方・佐多町馬籠・同郡）

長磯（鹿屋市古江・西之表市西之表）

大磯（垂水市牛根麓）、中磯（福山町福山）

小磯（南種子町西之）、高磯（指宿市十二町）、平磯（西之表市現和）、船磯（志布志町安楽）

「磯○○」型の地名は次のような数になる。磯平(19)・磯口(6)・磯ノ上(4)・磯辺(4)・磯脇(3)・磯崎(2)・磯元(2)・磯山(2)。以下は各1例。磯田・磯畑・磯牟田・磯塚・磯道・磯屋敷。――これらは「磯」を基準にして付けられた人為的要素が少々強い呼び名でもある。

「史と景のまち鹿児島」の宣伝文句につられたのか、リュックを背負った県外客によく出合う。しかし周囲を見回しても歩道を歩く鹿児島県民はほとんどいない。鹿児島県民はマイカー志向か新幹線志向なんだろう。県外客から尋ねられる道は決まって次の二つ。桜島桟橋と磯公園への道。外国人の場合「サクラジマ・ポート・ウェア？」「イソ・ビーチ・ウェア？」と問いかけて来る。指さしながらの答は「ゴー・ストレート」。

鹿児島県民の拠り処は「海」だと思うのだが、海・浜・船・漁民などの分野と取組む歴史家は少ない。大事な分野だと思いながらも手が回らない。若い世代に期待しよう。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (34)

海辺の地名――「浦」

平田信芳

鹿児島県の「浦」地名をまず列挙する。

浦田(32)・大浦(14)・深浦(9)・浦(8)・小浦(6)・浦上(5)・西浦(5)・浦底(4)・福浦(4)・浦川内(3)・上之浦(3)・内之浦(3)・前浦(3)・山浦(3)・湯浦(3)。以下は各2例、浦折・浦川・浦口・浦園・浦原・桑浦・佐多浦・塩屋浦・唐仁浦・友浦・広浦・横浦など。1例だけのものは種々雑多の70例。

さて、浦(8)・小浦(6)以下のものは例外もあるが、ほとんどが海辺の地名。しかし類例の多い浦田・大浦・深浦は一筋縄ではいかない。

深浦は水深の深い入江と考えがちだが、海岸から約2km離れた枕崎市西鹿籠に深浦という小字がある。入江に名付けられた地名だとすると、数千年以前の命名となる。そのように由来を古くみる自信は全くない。現段階では謎としておこう。

浦田32例のうち海辺に立地するのは阿久根市波留・加世田市唐仁原・西之表市国上・同市安納・東町山門野・同町獅子島の6例にすぎない。大半は先端・末端を意味する古語の末(うら)に由来する。いうなれば「うらなり」の同族である。

大浦14例のうち鹿屋市大浦・川内市田海・鶴田町鶴田・郡山町岳・松元町春山・田代町麓にある6例は山地に近く海辺の地名とはほど遠い。海辺の大浦は次の通りである。

内之浦町岸良・大浦町大浦・西之表市安納・南種子平山・上屋久町一湊・十島村平島・上甑村小島・同村瀬上所在の大浦である。大浦と小浦が併存するのは大浦町大浦と笠沙町小浦、南種子町平山の大浦・小浦、上屋久町一湊の大浦と同町口永良部の小浦である。

これらを見ると離島や僻地にすなおな地名が残存している。素朴な人々が生活している所にすなおな地名が残ることを示している。人口の都市集中という傾向がここ二世紀ばかり続いているが、地名はその現象に対して赤ランプを点滅させているとみてよい。過疎化現象は浦町・漁村から始まって農村部に拡がってしまった。過疎過密現象は自然現象というよりは人為現象である。人口密度のアンバランスから生じる自治体の財政悪化を打破するために、広域市町村合併の掛け声が日増しに大きくなりつつある。これは政治のミスを糊塗する方便ともみられる。

愛郷心の原点は小さな村・大字にあると思うのだが、それらを押しつぶしておいて、愛国心をとのうそぶきが聞こえるのは、まことにうら淋しい物語である。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (35)

海辺の地名――「江」

平田信芳

「江」一字の場合、中国では通常揚子江を指し、場合によっては大きな河を意味する。日本では入江を指すのが普通であり、大きな川を意味する場合がままある。「江」を含む熟語になると、どのようになるのか。県内の地名で考えてみたい。

○江と下に付くもの――向江(20)・高江(8)・永江(7)・俣江(3)・古江(2)。一例のものは入江・福江など17例。

江○と上に付くもの――江口(7)・江の尾(6)・江川(5)・江平(3)・江内(2)・江尻(2)。一例のものは江崎・江ノ島など15例。

○江○の型――大江島・大江口各一例。

○江○型から分析に入ろう。川内市五代大江島は大きな川すなわち川内川の中に出来た島(洲)を指す。川内市高江大江口は支流が大きな川に合流する地点を指すと理解できる。江○型は入江を主体とした地名であり、それぞれすなおに字義を考えることが出来る。

○江型。まず向江。「ムカエ」「ムカイ」は川を挟んでの向い側の呼び名を考えてよい。永江(長江)は長い入江もしくは相対的にみて長く感じられる川を指すものとみてよい。俣江は二つに分かれた入江という形状を指す地名とみられる。

ところが「高江」「古江」になると、入江を考えることは不可能となる。昔は入江だったと懐旧の情にひたっての地名が「古江」とは文字にこだわりすぎた地名解釈になる。昔日の入江が湿原になると、それは「潟(ガタ)」と呼ばれた。高江も入江を念頭におけば解釈に苦しめられる。古江・高江は古家(旧役所)・高家(高い大きな家)の変形と見る方が理解し易い。

古江――鹿屋市古江・鹿屋市花岡町古江

高江――川内市の大字・垂水市新城(上高江・下高江・高江口)・指宿市新西方・指宿市岩本(高江口・高江山)・出水市武本・頴娃町御領・隼人町東郷・入来町裏之名の各高江。

高家は普通「コウケ」と音読みされて身分の高い家柄を指すが、古くは「タカイエ・タカエ」と感覚的に高い建物を呼んでいたと考える。郷や村の役場だったかも知れない。古家・高家は歴史考古学的に確かめる必要がある。なお鹿児島県で史料的に最も古い地名「衣」は後世に「頴娃」と表記されるが、本来は「江」から始まった地名と考えられている。「頴娃」になったのは地名は二字で表わせとの行政指導が奈良時代にあったからである。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (36)

海辺の地名――「潟」

平田信芳

平成十三年の大河ドラマ「北条時宗」は時宗を三十四歳の若さで死なせて幕切れ。時宗を悩ませたフビライは三十六歳年長だから時宗の死を耳にしたのは七十歳のはず。テレビ画面でのフビライがあまりにも若かったので「なんじゃこれは」と思った。テレビドラマでは役柄の年齢は考えないのだろうか。

博多湾岸に築かれた石垣のシーンを見ながら石築地(石垣)を作る費用分担の割当てが大隅国の場合はその史料が残っていることを思い出した。おなじみの地名を抄出する。小河院、敷根十二丁・廻六丁・湊八丁。曾於郡、郡田名十三丁・重久名十三丁・田口八丁・大窪六丁。桑東郷、松永名十二丁・武安三丁・東郷六丁。桑西郷、内村三十丁・内山田五十丁・賢尻五十五丁・小浜六丁などである。一丁に対して高さ一丈(約三メートル)長さ一尺分の石垣の負担が課せられている。内山田五十丁・賢尻五十五丁は広い水田面積になる。

九州の人々が一致協力して築きあげた元寇防塁は見事にモンゴル軍の上陸を阻んだが、歴史地理学的に眺めると現在の海岸線より約四百メートルばかり離れた所に埋まっている。七百年間に約四百メートル、沖積地が拡がったことを示す。現在県内に約90例の「潟」地名があるが、鹿児島湾内では垂水(海潟)・根占(阿潟・潟)・指宿(潟口・潟山)・喜入(潟口)などに11例を見出すだけである。湾奥の国分・隼人地区の湾岸では「潟」地名は歴史の彼方に消えてしまっている。

十世紀前半に出来た「和名抄」に方後郷の名が見えるが、方後は「潟後(かたしり)」を意味した地名で、後世「国尻・賢尻(13世紀)」「堅志利・堅利(16世紀)」などの表現で登場する。国分郷小田名(隼人町小田)」にあったことが知られている。先述した石築地役「賢尻五十五丁」は小田の負担だったことを示す。鹿児島高専や隼人中学校敷地の南側は一段低くなっているが、その段落ちは海岸段丘を示すもので、その昔の海岸線であったことを地形は物語る。その一帯に「潟後・潟尻」などの地名が名付けられたとみてよい。

歴史の推移は必要以上に昔の海や潟を埋め立て陸地と化した。陸地の拡大を手放しで喜んでよいのか。沖積平野の広がりを考えると「潟」地名は消滅し易い一面をもっている。万葉・古今の時代は「潟」はよく歌に詠み込まれたが、今は研究者たちが干潟の見直しと生物多様性を訴えるようになった。それでも埋立めは強行される。世の中は全くがたがただ。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (37)

海辺の地名――「浜崎」

平田信芳

「崎」を含む地名のすべてが海辺にあるとは限らない。県内で類例の多い順にあげて見ても、尾崎(64)・山崎(42)・長崎(40)・川崎(32)・中崎(31)・崎山(23)・大崎(21)・野崎(18)・峯崎(17)・高崎(16)・宮崎(15)・田崎(11)・戸崎(11)・崎原(10)・浜崎(10)などで、海辺の地名と断言出来るのは浜崎だけである。尾崎・大崎・戸崎なども海陸半々になる。浜崎以外で海辺と考えられるのは荒崎(4)・御崎(3)・磯崎(2)にすぎない。

「崎」には「﨑」「嵜」などの異体字があり、名字の場合、常用漢字で「崎」と書くと、俺の家は「﨑」だ。「嵜」だと異議を唱えられる。異体字がパソコン・ワープロになく、この処置も頭痛の種子になる。読みもサキであったりザキであったりで、「崎」地名の分析は先々が思いやられるほど難しい。

さて私の地名カードにある県内の「浜崎」をあげてみる。カッコ内に示したもの以外はすべて「浜崎」である。

鹿児島市郡元・指宿市十二町(浜崎平)・名瀬市小湊・長島町指江・内之浦町南方・中種子町田島(浜崎山)・南種子町西之・金峰町宮崎・東市来町神ノ川・桜島町赤水。

指宿市十二町の「浜崎平」は幕末の豪商浜崎太平次に結び付けたくもなるが、その先祖は元々指宿出身でないので浜崎平にもとづいて浜崎を名乗ったとは考えられない。浜崎平という地名は浜崎太平次の屋敷があったことに由来するのかも知れない。「浜崎」姓の出自を考えると、残りは鹿児島市郡元と桜島町赤水だが、どちらも海運・舟運で栄えたとの歴史を聞かない。

実は今一つ、重要な「浜崎」が脱落している。わが家の背後にある多賀山はその昔「浜崎山」と呼ばれ、「浜崎ヶ城」という山城があった。その麓にある春日町には「浜崎」姓の家が数軒ある。今は多賀神社・東郷墓地(元帥東郷平八郎墓)・東福寺城跡などで知られているが、多賀神社や東郷墓地のある所が南北朝時代の浜崎ヶ城(東福寺城の支城)であった。浜崎山麓の稲荷川河口は、南北朝時代～戦国時代、港として栄え、守護大名島津氏の城下町を発展させる役割を荷負った。山城と港の組み合わせが島津氏を守護大名として成長させたとみてよい。そうすると「浜崎」姓のルーツも此処とみてよいだろう。

第二次世界大戦時の空襲で鹿児島市中心部の土地台帳が焼失したために「小字一覧」に記載がなく、地名カードから「浜崎」が一つ洩れていたにすぎない。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (38)

海辺の地名――津と泊

平田信芳

港を出る時と港に着く時、そこら辺りに活気が漂うから船旅は楽しい。船が着く場所の呼び名には古くからの津・泊・波止・港などがある。波止(波止場)・港などは考えてみると人手が加わった人文地名であり、自然地名とはニュアンスが異なる。これは中世以降に栄えた所と見てよい。それに比べると津や泊は自然地形と結び付いており、発生が古い古代的な表現だと気付く。

「津」の付く県内の地名を列挙すると、有名な坊津・網津をはじめとして浮津・大津・亀津・倉津などを思い付く。昔、海上交通で栄えた所である。その他に舟津・中津・中津川などがある。舟津は河川の中流域に多い。中津川は「中之川」の古い表現であり、舟運と関係がない。

「泊」は海岸に多い。以下例示する。

泊――垂水市二川・高尾野町江内・坊津町泊・上甑村江石・下甑村手打・名瀬市名瀬勝・知名町田皆

小泊――下甑村手打・坊津町泊・笠利町節田

大泊――下甑村手打・佐多町馬籠

京泊――川内市網津・東町川床・東町獅子島

海士泊――串木野市羽島・西之表市西之表

東風泊――高山町有明

八江泊(南風泊?)――佐多町伊座敷

島泊――佐多町伊座敷

和泊――和泊町和泊

その他にも阿後泊・間泊(佐多町)、片泊(三島村)、湯泊(屋久町)、前泊(伊仙町)、平泊(知名町)、茶泊・長泊(与論町)などがある。

京泊は京へ、島泊は種子島へ、和泊は大和へ向う船が風待ちに停泊した所と考えられる。東風泊・南風泊は「南東風は(ハエゴチャ)雨」の諺を忠実に守った臨時の避難場所。海士泊から考えさせられることは二つ。一つは海が荒れた日は海士泊で待機したこと、今一つは現在は海女が常識だが昔は男が「かづき」をやっていたのではないかということ。

昔の舟人たちは汐待ち・風待ちには時間をかけていた。気の長いことは尊敬に値いする。伊能忠敬の率いる測量隊が屋久島・甑島に渡る時、十日ほどの風待ちは普通のことだった。順風を見極めて一気に海原を駆け抜ける船頭の宰配は実に見事である。

自然の力を気にしない現代人の生き方は、やはり不自然。自然に逆らわず、世界をのんびりと回る船旅のような生き方が楽しい人生に結び付くのだろう。

Bon Voyage!

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (39)

海辺の地名――「浜」

平田信芳

前々回の「浜崎」は「崎」を主体に眺めた。今回は「浜」に焦点をしぼる。まず私の地名カードにある「浜」地名を列挙する。その数は今後10％程度増えるとみてよい。理由は県下96市町村のうち9自治体分のデーターが手元になく、カード化未了による。

浜が上に付く「浜＋○型」地名の場合。

(A)浜平(13)・浜崎(10)・浜川(8)・浜迫(8)・浜山(5)・浜島(2)・浜州(1)・浜走(1)などの自然地形名――小計48、約27％。

(B)浜上(9)・浜口(4)・浜辺(2)・浜中(2)・浜向(2)・浜脇(2)・浜元(2)などの位置地名――小計23、約13％。

(C)浜田(71)・浜道(11)・浜畑(9)・浜ノ丸(5)・浜添(3)・浜里(2)・浜村(2)・浜屋(2)などの人文的要素が加わった地名――小計105、約60％。

その他に浜尾・浜潟・浜尻・浜段・浜原・浜牟田など各1例のものが42例あり、「浜＋○型」の地名は218例になる。

浜が下に付く「○＋浜」型地名の場合。

(A)小浜(33)・長浜(11)・大浜(6)・浜(6)・白浜(6)・黒浜(4)・蟹浜(2)などの自然地形名――小計78、約55％。

(B)前浜(7)・上浜(7)・中浜(6)・東浜(4)・西浜(4)・下浜(4)・横浜(3)・脇浜(2)などの位置を示す地名――小計37。約26％。

(C)塩浜(18)・唐浜(2)・新浜(2)・古浜(1)・界浜(1)・宮浜(1)・鯨浜(1)など人文的要素が加わった地名――小計26。約18％。

その他に入浜・後浜・猿浜・高浜など各1例の地名が63例あり、「○＋浜型」の地名は204例になる。

これらの「浜」地名422例のうち奄美諸島にあるものが110例を占める。110例中、浜＋○型は23例・約20％、○＋浜型は87例・約80％になる。浜＋○型は人文的要素が色濃く、○＋浜型は地形・景観などと結び付く。離島の場合、浜は自然景観を多く残しながらも人々の生活と結び付いていたことを地名は物語る。

夏の朝早く浜辺を素足で歩く時のひんやりした感覚は心地よいものだった。幼ない日々磁石に多くの砂鉄をくっ付けてはしげしげと眺めていた他愛もない砂浜での遊びは妙に心豊かだった。しかし身近にあった砂鉄は怪物のようなテトラポットに奪われ、心を癒すために訪れると砂浜は浜がけに変っている。浜がけの出現は自然からの警告現象であり、あるべき自然の姿に戻すのが今後の課題である。世の中がおかしいとの声がうるさいが、多分日本人は賢こく処理するに違いない。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (40)

海辺の地名――「湊と清水」

平田信芳

港や波止は海辺の地名だが人手が加わった施設であり自然現象にもとづく地名とは言えないが、湊は港に比べると自然現象に近いと勝手に解釈する。自然現象である清水と組み合わせたのは、湊は清水の存在と切り離せないことを見越しての便法でもある。

私は清水(しみず)町に生まれ、そして住んでいる。その語源になった仁王堂水(にょうどみっ)というきれいな泉があったことも記憶している。五十年ほど前、鹿児島市の水源地として水道局所管となった。公民館を建ててやるとの条件だったそうだ。市民全体のためと称して住民の貴重な歴史遺産を甘言で取りあげた事実は隠しようもない。道路脇にきれいな水が豊かに流れていた清水町は全く干からびた町になってしまったからだ。

原点に立ち戻り、「清水」を国語辞典で眺めてみた。「しみず」湧き出る清い水、とある。「きよみず」は清い水・しみず。地下から湧き出るのが「しみず」、清く流れるのが「きよみず」のようだ。しかし川の底で地下から湧き出ている水は一体どちらに属するのか。国語辞典はちょっとしたことを調べる時は便利だが、このようにいい加減なところもある。解釈はてげで良かたーろなあ。

その昔、仁王堂水は上町の焼酎屋が焼酎造りの水として汲みに来ていたと教えられたが、それよりも大事な歴史的視点があることに最近気付いた。室町時代、第六代島津氏久が大隅国守護所を鹿児島(現在の清水町の地)に設けて以来、鹿児島は島津氏の城下町として成長することになるが、鹿児島本城とよばれた清水城は「豊かな飲み水」と密接不可分の存在だったのである。山城と河口港という立地条件が守護大名の町を成長させたのである。

治承の昔、源平の対立に捲き込まれて藤原成経・平康頼・俊寛僧都が鬼界が島に流された時、大隅国の鳩脇から乗船したことが長門本平家物語から読みとれる。鳩脇は隼人町野久美田に「破止脇」という小字名で残っている。破止脇を河口としている川の名は清水川である。富士の高嶺・三保の松原・次郎長で有名な清水港は、徳川家康の隠居所、駿府城の外港であった。地名を一々あげなくても「湊・港に清水あり」で合点がいくだろう。

昔は泉で汲んだ水を船に積み込むのは大仕事だった。遣唐船・遣明船、元や高麗の船が積み込んだであろう水の量を考えると、その行動日程は限られる。文永の役で元軍が一日で博多湾から姿を消した謎は水とも言える。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (41)

――宇都と迫…その立地

平田信芳

私はすなおな文字を書く方だと思い込んでいたが、城を域、藤原成経を戒経と読まれていたのに驚いた。無くて七くせなのだろう。また有名と書いたつもりでも名が脱落して有無実の文になったりで、これはと考え込んだ。最近、昼食後や夕食後、テレビをぼやーっと見ながら眠るようになった。一ねむりすると頭脳明晰になるが、とにかく眠い。バスや電車の中で肩を叩かれる。振り向くと若い女性がどうぞと席を譲ろうとする。いささかショック。すぐ降りるからとことわってはいる。時たま左足にしびれを感じる。半世紀前の捻挫の古傷が原因か。足の次に手がしびれ始めたら人生におさらばと覚悟せねばなるまい。老化現象はしずかに進みつつある。

この地名シリーズも尻切れトンボで終らせてはなるまいから、ある程度見通しを立てておこう。自然地名で取りあげてないものに山・川・谷・野・原などがあるが、それらは省略して鹿児島県に多い宇都・迫・平のみを取りあげ、平の次は「田」地名でしめくくることにする。迫・平・田だけでも結構いろいろある。当分は知恵をしぼらねばなるまい。

地名研究のねらいは地名に秘められている歴史の解析であり、信仰地名・集落地名・水利地名・交通地名・歴史地名などの人文地名が主体になるが、このシリーズは花鳥風月を楽しまれる方々が対象であったので自然地名にしぼって来たにすぎない。その辺はご理解を頂きたい。

さて、「宇都」地名はそんなに多くない。宇都も迫もシラス台地が浸食されて形作られる地形で、低地の広い部分が「迫」と呼ばれ、より高所の狭い部分が「宇都」になる。「宇都」地名の多い所、少ない所を例示する。

(1)「宇都」地名が多い所

鹿児島市坂元・犬迫・下福元、大浦町、川辺町田部田、大根占町城元、東郷町、樋脇町、宮之城町。

(2)「宇都」「迫」ともに多い所

鹿児島市小山田、加世田市内山田・津貫、串木野市下名、姶良町寺師、蒲生町米丸、下久徳、牧園町持松、高尾野町江内、頴娃町郡、吉田町東佐多浦・西佐多浦・本城。

(3)「宇都」地名の少ない所

枕崎市、有明町、大崎町。これらは「迫」地名は多い。指宿市西方・東方は「宇都」地名はないが「迫」地名は多い。

(4)「宇都」地名のない所

名瀬市、天城町、大和村、与論町、下甑村。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (42)

――宇都と迫・宇都らしい地名

平田信芳

鹿児島県での「宇都」地名のランキングは次のようになる。

①宇　都　127例　②宇都口　42例
③宇都迫　38例　④宇都山　26例
⑤宇都平　23例　⑥上宇都　23例
⑦中宇都　13例　⑧宇都良　12例
⑨庵ノ宇都12例　⑩大宇都　11例
⑪小宇都　11例　⑫宇都上　11例
⑬宇都頭　10例

同じものが20例ほどあれば大抵の人が耳にしたことがある地名と考えてよく、一桁台のものは特異な地名と考えてよいだろう。

宇都・迫それぞれを数えてあげたことはないが、カードの分量から「宇都」地名は約一千、「迫」地名は約八千とみている。宇都と迫に付く共通の用例(谷宇都・谷迫、諏訪宇都・諏訪迫など)を拾いあげてみると、50例ほどある。その中で両者を数的に比較すると、宇都に多い地名・迫に多い地名がはっきりし、宇都・迫の環境が浮かびあがって来る。

宇都にだけ見られる地名――宇都良(12)、宇都川内(4)、宇都越(3)、宇都出口(2)、宇都屋敷(2)、網ヶ宇都(2)、高田宇都(2)、宇都川路(1)、笠ヶ宇都(1)、矢ヶ宇都(1)。

迫に比べると宇都に多く見られる地名。

宇都口(42)――迫口(9)
宇都山(26)――迫山(8)
宇都谷(9)――迫谷(3)
庵宇都(12)――庵迫(8)
堂宇都(2)――堂迫(50)

以上のように整理してみると、「宇都」的な地名は宇都・宇都口・宇都山・宇都谷・宇都良・宇都越・庵宇都などで、山寄りに見られる地名であることが判る。

国分小学校横の道を辿ると、今は消滅した大隅線のトンネルの上を越えて国分中学校に向う坂道になるが、そこは「宇都越」と呼ばれる所だった。また、その昔念仏や読経の声が聞えた仏堂は、古くは宇都に「庵」が結ばれ、時代がくだると迫に御堂が建てられたことが庵宇都(12)・堂迫(50)の地名から判断できる。

宇都良は宇都に地名語尾「良」が付いた形であり、宇都を強調したより古い表現とみられる。国分市郡田、牧園町万膳、串木野市冠岳、東郷町斧渕、宮之城町平川、東市来町伊作田、同神ノ川、吹上町和田、金峰町大坂、加世田市内山田、川辺町中山田、頴娃町牧ノ内など歴史の古そうな所ばかりにある。他に宇津良が8例あるが、その区別は不明。考えてみてもうとうと・うつらうつらするばかり。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (43)

――宇都と迫・迫のよみ

平田信芳

つい先日原稿を送ったような気がするが、あっという間に次号の原稿締切日が迫って来る。光陰矢の如く、歳月人を待たず、とは言い得て妙だ。迫る(せまる)と迫(さこ)とは全く別の概念であるためか、鹿児島では迫を何故「さこ」と読むのかと問いつめられることが多い。返答に窮した挙句、「角川日本地名大辞典」47都道府県を目下しらみつぶしに検討している。小字一覧を収録していない府県もあるので、条件を等しくするために本文に立項されているものだけを比較している次第。九州・四国・中国を済ませ、やっと京都府に辿り着いた。京都にも「迫」地名があり、嬉しくなって胸に迫るものを感じる(大袈裟な)。「迫」地名の本場と考えられる鹿児島県の立項数は5例。それに比べて宮崎県42例・大分県49例・広島県19例には驚いた。「迫」地名は鹿児島県だけの専売特許ではなかった。

47都道府県を調べ終ってから結論を出すべきだが、すべてを調べ終るのがいつになるか目途が立たないので『日本地名索引』(アポック社)で大体の傾向を探ることにする。以下「迫のよみ」各種を府県別に示す。

迫(さこ)――奈良・京都・岡山・広島・島根・山口・高知・愛媛・徳島・福岡・大分・長崎・熊本・宮崎・鹿児島

迫(さく)――福島

迫(せ)――奈良・三重・和歌山

迫(ば)――福島・熊本

迫(ぶさ)――和歌山

迫(はざま)――岩手・宮城・愛媛・滋賀

迫(はざ)――兵庫・岡山・愛媛・熊本

迫(はさ)――栃木・岐阜・三重

硲(はざま)――京都

佐古(さこ)――岐阜・福井・京都・徳島・愛媛・高知・山口・大分

浴(さこ)――徳島

垢(さこ)――鳥取

左近(さこ)――鳥取

迫(さこ)と読むのは近畿以西の西日本、中部以東は迫(はざま)と読むと大別してもよいだろう。元寇に備えて関東御家人の九州下向、大名の配置転換、天領の設置などによって九州にも「はざま」地名が入り込んでいる福岡・佐賀・長崎・大分・熊本・宮崎各県に少数例ではあるが「はざま」が見られる。そのような中で「はざま」が挟まっていないのは鹿児島県だけ・島津氏の一円支配という歴史的環境がそこにあるからだろう。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (44)

――宇都と迫…迫の類型

平田信芳

まず鹿児島県内の「迫」地名ランキングの上位は次のようになる。

1大迫 245例　2長迫 158例
3後迫 154例　4松迫 128例
5迫田 112例　6中迫 105例
7○迫平 97例　8西迫 93例
9柳迫 77例　10前迫 74例
11桑迫 63例　12船迫 54例
13小迫 52例　14堂迫 50例
15柿木迫 50例　16立迫 48例
17深迫 44例　18宮迫 40例
19迫 40例　20宇都迫 38例
21榎迫 37例　22桃木迫 36例
23池迫 36例　24北迫 35例
25水迫 35例　26梅木迫 33例
27東迫 32例　28上迫 32例
29平迫 31例　30大迫平 31例
31狐迫 30例　32鎌迫 29例
33福ヶ迫 27例　34南迫 27例
35迫畑 27例　36道ヶ迫 26例
37曲迫 26例　38鍋迫 25例
39竹迫 25例　40赤迫 24例
41枝迫 24例　42茱萸木迫 23例
43迫尻 23例　44山神迫 21例
45木場迫 21例　46境迫 20例
47弓場迫 20例　48渡迫 20例
49田原迫 20例　50楠迫 20例
51菖蒲迫 20例　52湯ヶ迫 20例

これらのうち1長迫(永迫)・11桑迫(桑木迫)・15柿木迫(柿迫)・21榎迫(榎木迫)・22桃木迫(桃迫)・26梅木迫(梅迫)・32鎌迫(釜迫)・33福ヶ迫(吹迫・蕗迫など)・42茱萸木迫(久見迫)・49田原迫(俵迫)・50楠迫(楠木迫)などは、それぞれカッコ内の表記のものもその数に含まれている。

これらは次のように類型化できる。

A形状地名(大迫・大迫平・長迫・○迫平・平迫・船迫・鍋迫・小迫・深迫・池迫・水迫・湯迫・曲迫・赤迫・枝迫・迫・鎌迫)

B位置地名(後迫・中迫・宇都迫・境迫・西迫・前迫・上迫・渡迫・北迫・南迫・木場迫・道迫・迫尻)

C目印地名(松迫・柿木迫・桃木迫・福ヶ迫・柳迫・榎迫・梅木迫・竹迫・桑迫・茱萸木迫・楠迫・菖蒲迫・狐迫)

D信仰地名(堂迫・立迫・宮迫・山神迫・弓場迫)

E田畑地名(迫田・迫畑・田原迫)

A・B・Cは自然地名、C・Dは人文地名。歴史的に新しい人文地名は「迫」に限っても数は少ない。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (45)

――宇都と迫：迫と水のかかわり

平田信芳

シラス台地が浸食されて出来る地形が迫であり、迫と水は密接不可分の関係にある。水に恵まれていたことを示す地名として次のようなものがある。カッコ内はその数である。

迫田(112)・迫畑(27)・茶園迫(19)・池迫(36)・仁田迫(19)・樋迫(15)・水迫(31)・井川迫(15)・井手迫(12)――これらは水の便がよい所で、集落に近かったとみてよい。

一方、要注意の場所もあった。

崩迫(17)・洗迫(3)・出水ヶ迫(3)――これらは鉄砲水によって洗い流されたり、崩壊することが多かったと考えられる。そのような所に住むのを避ける知恵が昔の人々にはあった。また、枯木迫(8)という地名もある。地下水位が下ったのか水脈から離れたのかは判らないが、枯木にもとづく地名になる。「枯木も山のにぎわい」と強がる向きもあるが、何となく佗しい。鹿児島市には本来「枯木迫」であった所に、反対語の「常盤」という瑞祥地名にすり替えた例もある。

浸食崩壊地名や枯木迫などは警戒すればよい。その他の水にかかわる「迫」地名は人々の生活をうるおして来たとみてよい。ただし仁田迫は狩猟の場とか城の防備には役立っただろうが、生活に利用するのは難しかったと考えられる。仁田と同じく湿地を示す地名に牟田がある。牟田は古来西日本にあった土着語であり、仁田は関東からの移入語と考えてよい。両者を比較することによって歴史の推移への切り口を見出すことも可能である。仁田迫は元々牟田迫と呼ばれていたのだろうが、支配者の移住によって七・八百年の推移の中で表現が変化したと考えざるを得ない。仁田迫と牟田迫の地名例を以下に列挙する。

仁田迫――阿久根市脇本・串木野市下名・加世田市武田・枕崎市西鹿籠・長島町平尾・宮之城町久富木・吹上町与倉・笠沙町片浦・知覧町郡・知覧町東別府・山川町大山・喜入町前之浜・喜入町中名(以上薩摩国)、加治木町小山田・大根占町馬場・串良町細山田(以上大隅国)

牟田迫――加世田市津貫・宮之城町泊野・吹上町小野・頴娃町郡・喜入町瀬々串(以上薩摩国)、鹿屋市下高隈・根占町辺田・田代町麓(以上大隅国)。

大隅と薩摩に分けてみると、薩摩の方が変動が激しいことが判る。薩摩の方は機を見るに敏で進歩的とも言えるが、反面節操がないとも言える。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (46)

――宇都と迫：迫と信仰

平田信芳

迫には宗教的雰囲気が漂っているのだろう。信仰に関わる地名が多い。地名カードから拾いあげてみた。以下、神社・寺院・民俗信仰それぞれについて類例の多い順に列挙する。

神社と結び付くもの――宮迫(40)・鎮守迫(15)・諏訪迫(11)・稲荷迫(9)・鳥居迫(9)・天神迫(5)・権現迫(5)・八幡迫(5)・伊勢迫(3)・愛宕迫(2)・神楽迫(2)・九玉迫(1)・山王迫(1)・日枝迫(1)・霧島迫(1)

仏像・寺院と結び付くもの――堂迫(50)・寺迫(9)・庵迫(8)・観音迫(8)・仏迫(6)・塔迫(6)・不動迫(3)・妙見迫(2)・塚迫(2)・供養塚迫(2)・高塚迫(2)・墓迫(2)・大塚迫(1)・阿弥陀迫(1)・弥勒迫(1)・薬師迫(1)・大日迫(1)・大王迫(1)・王子迫(1)・水天迫(1)

民俗信仰と結び付くもの――立迫(47)・山神迫(21)・弓場迫(20)・早馬迫(11)・星ヶ迫(6)・塞之迫(4)・銭神迫(1)

これらの中で20例以上のものは堂迫・宮迫・立迫・山神迫・弓場迫であり、民俗信仰と結び付くものが圧倒的に多い。まず立迫から考えてみる。尾立・柴立・杖立・登立・柱立・花立・鉾立・馬立・矢立・立石・立神など「立」地名には意味ありげなものが多い。ここではあまり立ち入らないことにし、立迫の立地を「立」と「宮」の場合で比較考察するに止める。立山(89)・立迫(47)・立野(40)・立平(30)に対して、宮迫(40)・宮山(11)・宮平(7)・宮野(3)という数値になる。立迫と宮迫は釣合いがとれているが、山・平・野については比較にならない。「立」地名として残っている民俗信仰の年代的古さをうかがうことが出来る。

神社と結び付くものでは諏訪迫と稲荷迫が中堅クラスになるが、諏訪神・稲荷神は中世以降島津氏によって招来されたものであり、それ相応の数値となるのであろう。伊勢神・愛宕神は近世以降の移入神である。近世における神社の立地は山上か山麓が普通であり、迫に鎮座する例は少ないことを物語っている。

仏像・寺院に結び付くものでは、数少ない類例の中に四方仏(五仏)の名が見えているのは面白い。(東方仏)薬師如来・(南方仏)観音菩薩・(西方仏)阿弥陀如来・(北方仏)釈迦如来・(中央仏)大日如来を村落や地域守護のために配置するのが、四方仏(五仏)の思想である。北方仏の釈迦如来が登場せず、観音迫が多いのは南の国の現象なのだろうか。自然現象にもとづく「迫」も信仰と結び付くと神秘的にみえてくる。自然地名を逸脱して人文地名になるからであろう。(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (47)

――宇都と迫・鬼ヶ迫・姥ヶ迫

平田信芳

「昔々ある所に」で始まる昔話やおとぎ話は時代や場所を超越した話とされるが、果たしてそうなのだろうか。H・シュリーマンが子供の時に聞いたギリシア神話のイリオン城を夢みて探し求めたのが考古学のはじめになったことに照らすと、数多い日本の神話・伝説への切り口を求める歴史家が現われてもよいと思うが、一向に現われない。ここらでちょいとメスを加えて切り口を開けておこう。

海神宮・竜宮を訪れるのは山幸と浦島太郎。古事記や日本書紀が記す山幸の舞台は南九州。浦島太郎は丹後国風土記逸文に見える水江浦嶼子がモデル。南九州からと丹後国から海の彼方へ向うとすると、朝鮮半島南部が対象の地となる。昨年全羅南道を訪れた時、墓地(墓域)の形が銅鐸型であることに気付き、前方後円墳周濠の形のルーツは朝鮮半島南部にあると知った。今まで日韓両国の考古学者がそれに気付かなかったのも不思議な話である。それは兎も角としても、山幸・浦島太郎の話は古墳時代の話とみてよいだろう。

桃太郎の話はキビ団子が出て来ることから場所は吉備国。奈良時代に吉備真備という秀才が登場するので、奈良時代よりも以前の話と考えられる。『山の名で読み解く日本史』という新書によると、岡山県鬼城山が鬼ヶ島、吉備津彦がモデルとのこと。一寸法師は清水坂の鬼が相手、大江山の酒呑童子や羅生門の茨木童子らを成敗する鬼退治は、すべて平安時代のこと。

悪と対決するこれらの話は時代、場所ともに大体限定出来る。ところが県内の小字で「鬼」地名や「姥」地名が意外に多いと気付くが、鬼や姥が村人に悪事を働いたとの言い伝えは、ほとんど聞かない。何故なのか。

「鬼」地名119例のうち鬼ヶ迫が19例。「姥」地名19例のうち姥ヶ迫8例が目立つ。鬼ヶ宇都は見当らず、姥ヶ宇都が1例あるだけ。鬼や姥が宇都でなく迫にいたということは、鬼や姥の隠れ場所が身近な所・集落近辺にあったことを示す。それでいて村人に害を加えない。ということは鬼や姥は村人と血のつながる存在だったのだろう。「鬼は外・福は内」と豆を撒いて鬼を払う春分の日の行事が無病息災・家内安全を祈るのにあることと併せ考えると、おとな達は鬼や姥の実体を知っていたと考えざるを得ない。子供たちが近寄ることがないようにハンセン病患者・結核患者などを隔離し続けた場所が鬼ヶ迫・姥ヶ迫の地名となったのであろう。悲しい歴史であった。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (48)

――宇都と迫…タタラ迫と鍛冶屋迫

平田信芳

小学校唱歌「村の鍛冶屋」はとっくの昔に教科書から消えたのだろうと思う。周囲を見回しても鍛冶屋から変身したと思われる町工場などを見かけなくなった。子供たちに教えるにも日本刀づくりのビデオによってだけの存在となった。

私の地名カードには網屋・紙屋・紺屋など各種の職業・産業に由来する地名を拾い出してあるが、圧倒的に多いのは鍛冶屋・鉄山・タタラである。タタラは古代の製鉄、鍛冶屋は近世の製鉄と結びつく。古来重要な産業であるために職業地名の中で突出するのは当然すぎることである。しかし日本の歴史の中では特別視されることはなかった。

地名カードを改めて眺めると「タタラ」地名30例のうちタタラ宇都3例・タタラ迫12例で、その半数を占める。その他のタタラ地名も人里を離れている。「鍛冶」地名99例のうち鍛冶屋宇都3例・鍛冶屋迫10例という数値は「タタラ」地名に比べるとその割合が低くなるが、これからも近所迷惑にならない場所でトンテンカンと鎚音を響かせていたに違いない。産業革命・技術革新によって登場した汽車・車・飛行機などは所構わず騒音を撒きちらすだけでなく、今では大気汚染・地球温暖化の元凶となっている。しかし人々は生活の便に慣れ切って、騒音にも麻痺している。昔の鍛冶屋は人々に迷惑をかけないよう気配りをしていた。

鹿児島市下竜尾町に佐藤小路(さとんすっ)という地名が残っている。これは室町時代に刀工佐藤清左が住んでいたことに由来する。白尾国柱『倭文麻環(しずのおだまき)』によると、十八世紀末でも夜半に妖怪が現われる淋しい所だったらしい。また薩摩の刀と云えば波之平が有名。波之平の産地である谷山の笹貫はやはり村はずれだった。明治維新に際し多くの逸材を輩出した加治屋町には鍛冶屋に由来するとの伝承はないようだが、江戸時代の初めはやはり町はずれであった。

今は昔、高校世界史の授業で中世都市やギルドの親方を講義する時、親方になれなかった職人たちは田舎に帰ってカントリーマスターになる。それが「村の鍛冶屋」だ。父子代々銭を蓄えてマニュファクチュア経営主となり、さらに産業資本家に成長して近代資本主義社会のにない手となる、と語るものだった。日本の歴史は「米」中心に眺められているが、「鉄」を中心に据えると違った視点の面白い歴史が構築されるだろう。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (49)

――宇都と迫：植生と生息による差異

平田信芳

昔の人はどんな植物が生えているか、どんな動物がいたかによって地名を名付けることが多かった。いわゆる目印地名である。植物によったものが多く、動物の場合は少ない。今回は植生や生息を通して宇都と迫を比較してみた。いずれも県内の地名例である。

松ヶ迫――126　松ヶ宇都――2
柳ヶ迫――75
（柳宇都なし。以下空欄はなしを示す）
桑木迫――63　桑木宇都――2
柿木迫――50
桃木迫――38　榎木宇都――1
榎木迫――38
梅木迫――33
竹　迫――25
グミ迫――23
楠木迫――20　楠木宇都――6
菖蒲迫――20　菖蒲宇都――3
桜　迫――18　桜　宇都――3
梨　迫――16　梨　宇都――1
柊木迫――15　柊木宇都――2
椨木迫――14
椎木迫――12
杉　迫――11　杉　宇都――3
萩　迫――10　萩　宇都――2
栗木迫――9　栗木宇都――1
葛　迫――6　桂　宇都――1
青木迫――5　青木宇都――1
菅　迫――4　菅　宇都――2
枦　迫――3　枦　宇都――2

他に藤迫(19)・芋迫(16)・タラ迫(12)・櫟木迫(11)・イラ迫(11)・楢迫(10)・茗荷迫(10)・稗迫(9)・蕨迫(9)・苺迫(8)・桐木迫(8)などがあるが省略した。対応する宇都地名は当然ない。

植生を考えた場合、迫で生育する樹木が圧倒的に多く宇都には少ないということが上下に列挙することでよく判る。また上段の樹木は人々の生活に役立ったものばかりだが、宇都地形には縁が薄いようだ。次は動物の場合。

狐　迫――30　狐　宇都――1
熊　迫――7　熊　宇都――1
狸　迫――5
蛇ヶ迫――3　大蛇宇都――1
兎　迫――2　兎　宇都――2
鷺ヶ宇都――2
蝙蝠迫――1　蝙蝠宇都――2

狐迫と熊迫が目立つ程度。動物はじっとしていないから動物なのであり、地名や人里にはなじまなかった。コウモリとサギが宇都での存在感を示したようだ。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (50)

――宇都と迫：論迫・境迫・隠迫

平田信芳

東・西・南・北や前・後を冠して集落との位置関係を示す地名は数多い。地名カードを見ると西迫92例・北迫35例・東迫32例・南迫27例、後迫149例・前迫73例になる。そこには田や畑があり、それらを所有していたことによって西迫とか後迫とか前迫などの名字が付けられたのだろう。県内で日常身辺で接する名字でもある。

一方、数は少ないが道路として利用されたことを示す地名がある。通迫8例・大道迫4例・木道迫2例などである。これらはいつも通っているために地名として意識することはない。同時に名字になることもない。今回は同様な例で村人以外は知るはずもない論迫・境迫・隠迫などを検討材料にあげる。これらは歴史の彼方へ消えてしまった事件を物語る地名でもある。

(A)論　迫――阿久根市西目・伊集院町大田
論之迫――鹿児島市小野・西之表市安城
論ケ迫――指宿市新西方・指宿市東方・指宿市十町・喜入町生見・郡山町厚地・加治木町西別府・牧園町下中津川・牧園町万膳・栗野町幸田・財部町北俣
論地迫――川内市東手・末吉町諏訪方
論所迫――大隅町中之内

(B)境　迫――鹿児島市川上・鹿児島市吉野・鹿児島市小山田・鹿児島市伊敷・鹿児島市田上・鹿児島市鴨池・鹿児島市郡元・松元町春山・松元町上谷口・横川町下ノ
境ケ迫――鹿児島市吉野・指宿市西方・指宿市東方・指宿市岩本・東市来町美山・根占町別府・田代町川原
境ノ迫――大根占町城元
堺　迫――鹿児島市坂元
界　迫――溝辺町三縄

(C)隠　迫――伊集院町恋之原・松元町上谷口・知覧町厚地・山川町大山・上甑村瀬上・鹿島村藺牟田
隠ケ迫――鹿児島市犬迫・鹿児島市西別府・松元町石谷

中世の武士たちは所領を守るために文字通り一所懸命であった。南北朝時代～戦国時代は、土地争いから戦乱へ突入するのが常であった。A・B・Cに掲げた地名を白地図上に落としてみると、鹿児島・伊集院・指宿・溝辺・牧園・末吉など、戦乱の舞台となった地域が浮かびあがる。江戸時代は戦乱がないので、論迫はそれ以前に争いの原因となった所、境迫は双方納得の緩衝地帯、隠迫は百姓たちの避難場所だったと理解出来る。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (51)

――「平」…平地名ランキング

平田信芳

黄泉比良坂（よもつひらさか）。イザナギ・イザナミ神話の中で、此の世とあの世（黄泉国）との境界とされた場所である。鹿児島県にはヒラ・サカの地名が多いが、さらに南に行くと沖縄方言では「上から見ればサカ、下から見ればヒラ」と区別するらしい。

鹿児島市平之町の立地から考えると「平」は山裾の緩傾斜地をさす地形地名とみてよいだろう。「平」地名分析の手始めとして県内におけるランキングをまず示す。県内96市町村の中で20例以上同じ地名があれば一般的に知られた地名とみなしてよいので、20例以上に限定して提示する。上段に平○型地名・下段に○平型地名を並べる。

①平田 172　②平原 115　③平山 60　④平野 47　⑤平 45

①大平 163　②前平 100＋45　③田平 74＋200　④後平 64＋31　⑤西平 60＋100　⑥池平 59　⑦荒平 56　⑧川平 50　⑨小平 49　⑩井手平 46　⑪中平 40　⑫崩平 39　⑬大迫平 38＋96　⑭北平 38＋52　⑮松平 34　⑯上平 30＋24　⑰滝平 30　⑱立平 30　⑲片平 29　⑳東平 25＋81　㉑城ヶ平 25　㉒下平 24　㉓宇都平 24　㉔陣ノ平 22　㉕屋敷平 22　㉖落平 21　㉗野平 21　㉘堂平 21　㉙南平 20＋38　㉚磯平 20　㉛向平 20

⑬畠 21　⑭見 20

ゴシック体の○○前平45・○○田平200・○○後平31・○○西平100・○○迫平96・○○北平52・○○上平24・○○東平81・○○南平38などの複合形を加えると順位が変る。平田と田平、小生ゆかりの地名がダントツ・いやはや。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (52)

――「平」…水に恵まれた所

平田信芳

前回紹介したように平田・田平が数の上でダントツということは、「平」に水田が多いことを物語る。また次の地名を見ただけで水に恵まれた所であることはガッテンがいくに違いない。

池平(59)・井手平(46)・滝平(30)・落平(22)・冷水平(4)・樋ノ平(3)・樋口平(2)・山川平(2)・貫平(2)

落平までと冷水平以下では落差が大きいが、分けへだてのないように説明する。まず自然の要素が大きい滝平・冷水平・山川平の説明から入ろう。滝のある平が滝平なのだろうが数十メートルの落差がある滝に付く地名とは考えられない。大瀑布もそんなにはない。冷水平はヒヤミズが湧き出る所。どれほど冷たいかを試すのは止めよう。文字通り「年寄の冷水」になるからだ。山川(ヤマンコ)とは山中の泉・湧水地をいう鹿児島の方言である。表記も山河平(鹿児島市下福元)・山ノ子平(中種子町納官)であり、真面目に「山川平」と書く地名はない。

池平・井手平・落平・樋ノ平・樋口平・貫平。これらはすべて人手の加わった人為地名である。水稲耕作のために池を作り、井手を作って堰き止め、水田に引いた水を河に戻す「落(オトシ)」を作るなど、先祖伝来の苦労・工夫が凝縮されている地名である。

樋ケ平(鹿屋市大浦町)・トヒガ平(開聞町川尻)・囲子樋平(枕崎市東鹿籠)・樋ノ口平(垂水市新城)・樋口ノ平(中種子町野間)などのうち、垂水市新城のものだけに「タイノクチヒラ」とルビがある。トヒガ平と伴せるとほとんどが「トイ」と読むのだろう。「樋口(ヒグチ)」は鹿児島県ではあまり聞かない表現でもある。また最近では新屋敷の名称に押されて影が薄くなったのが鹿児島市の樋之口(タイノクッ)という地名である。トイノクチ→テノクチ→タイノクッの変化だと説明されているが、鹿児島語はそのように複雑な変化をするものだろうか。私は疑問を感じている。昔は野町や浦町の入口に縄がのれん状に垂れ下っていて「垂口(タレノクチ)」と呼ばれていた。その中は一種のアジールで自由な世界だった。垂水をタイミッと呼ぶように、タレノクチ→タイノクッの変化ならば理解出来るのだが。

貫平(入来町浦之名)・萱貫之平(吹上町与倉)。貫(ヌキ)はシラス崖に水平にトンネルを掘って水を得る工夫をした所。手抜工事では水を得られなかっただろう。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (53)

――「平」…つわものどもが夢の跡

平田信芳

夏草やつわものどもが夢の跡。松尾芭蕉が平泉を訪れ、安部貞任・藤原秀衡・源義経らを想起して詠んだのが金色堂や衣川館への追想句であった。訪れたことがないので地名辞典で探らざるを得ない。すべて岩手県西磐井郡平泉町所在であった。宮城県とばかり思っていたからマコチゲンネ次第。高校時代のテキスト『奥の細道』があれば読み返すことも出来ただろうに。棄てた憶えはないのだが。

さて地名カードを眺めると、平泉ほどではないが県内の「平」地名は、その昔つわものどもの拠点だったことを物語ってくれる。とくに城ヶ平(24)・陣ノ平(22)・屋敷平(22)・平城(9)・関平(5)などが目に付く。これらのうち牧園町三体堂の関平はミネラルが豊富な「関平鉱泉水」としてよく知られている。他の4例は関ケ平(蒲生町下久徳・伊集院町上神殿・吹上町与倉)と石関平(隼人町松永)である。戦国時代、これらの土地に関所が置かれたことなどあまり知られていないが、中世・近世の道を考える際に手掛りの一つにはなり得る。以下、つわものゆかりの地名を城(領主の拠点および住民の避難所)と陣(攻城軍の拠点)に限定して眺めてみる。

城ヶ平(13)(**鹿児島市田上・鹿児島市郡元・鹿児島市中**・指宿市東方・指宿市池田・頴娃町上別府・枕崎市東鹿籠・串木野市羽島・姶良町上名・**加治木町西別府**・垂水市牛根麓・高山町後田・高山町新富)

城之平(11)(**川辺町高田・東市来町養母・野田町上名**・祁答院町藺牟田・**蒲生町北・福山町福山**・根占町山本・中種子町納官・上屋久町宮之浦・上屋久町小瀬田・宇検村阿室)

陣ヶ平(10)(**鹿児島市田上・鹿児島市郡元・東市来町長里**・樋脇町塔之原・松元町上谷口・**蒲生町米丸・蒲生町北・加治木町日木山**・隼人町小浜・鹿屋市高牧)

陣之平(12)(**鹿児島市上福元**・知覧町西元・知覧町郡・**川辺町野崎**・吹上町和田・川内市東手・川内市麓・阿久根市多田・**高尾野町大久保**・郡山町川田・**福山町福山**・輝北町平房)

ゴチック体のものはそれぞれ対応する城ヶ平↔陣ヶ平、城之平↔陣之平がある。陣ヶ平に対応する城ヶ平がない所は、城山なり城ヶ谷を地図で見出せるだろう。鹿児島市に城ヶ平や陣之平などの地名があることなど、とっくの昔に忘れ去られた。鹿児島市以外は過疎化に拍車がかかっている。これらの地名はやがて忘却の彼方の存在となり、つわものどもの夢の跡など顧る暇人は皆無となるのだろうか。

(鹿児島県地名研究会世話役)

自然現象にもとづく地名 (54)

――「平」…古い神社が多い

平田信芳

神社の立地を一般論的にいうと、山の中腹にある神社は由緒が古く、その次は山頂になり、山麓のものは時代的に新しい。神社と結び付く地形地名「迫」「平」「山」を併記して整理すると、神社の時代相を垣間見ることが出来そうな気がする。以下は県内の地名例。

A **鎮守迫12**　鎮守平8　鎮守山6
　八幡迫5　八幡平1　八幡山1
B 権現迫5　**権現平9**　権現山7
　天神迫5　**天神平9**　天神山7
C 諏訪迫9　**諏訪平10**　諏訪山5
D **稲荷迫8**　稲荷平2　稲荷山7
E 愛宕迫2　愛宕平4　**愛宕山7**
A′**伊勢迫3**　伊勢平2　伊勢山1
　山王迫2　山王平1　山王山1
F　住吉平1　住吉山1
　若宮平1
　祇園平1
　金比羅山1
　秋葉山1

数的にはA鎮守・八幡（迫→平→山）、B権現・天神（平→山→迫）、C諏訪（平→迫→山）、D稲荷（迫→山→平）、E愛宕（山→平→迫）、A′伊勢・山王（迫→平→山）、Fその他　に類型化出来る。

少ない例Fから考察を始める。「迫」地名・「平」地名のない金比羅信仰・秋葉信仰は時代的に最も新しい。「平」地名のみの若宮・祇園信仰も時代的に新しい。住吉神は「迫」と結び付かないが、古い時代の航海神であり、A型に近いと見るべきだろう。「山」地名が多いE、愛宕信仰は近世に入って来たもの。Aの鎮守神のみが在来神と見てよく、他はすべて移入神である。大隅正八幡（鹿児島神宮）・新田八幡の存在を考えると、A型が最も古い。C諏訪神・D稲荷神は島津氏によって持ち込まれた信仰であり、島津支配確立以後の集落神とみてよい。C型・D型よりも早く入っていたものがB権現（熊野信仰）・天神（菅原神社）であり、平安末～室町時代の移入神とみられる。A′の山王（日吉神社）・伊勢信仰は江戸時代に生じた復古思想に結び付くものが多い。

個々の神社にはそれぞれ創建に関わる由緒が伝えられており、それらの年代を加味すれば神社信仰の歴史を地名から考えることも可能となる。移入神は時代の流行と結び付くので考慮し易いが、土着の在来神は難しい。上述の神々より時代は古いとみてよいだろう。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (55)

――「平」…寺とのかかわり

平田信芳

前回、神社をとりあげた。対照的な寺院は鹿児島県の場合非常に取り組みにくい。明治維新のリーダーになったのはよいが、徹底した廃仏毀釈によって寺院はすべて破壊された。その歴史が鹿児島の文化に大きな心理的負担となってのしかかっている。このことを反芻する人は少ない。廃仏毀釈の凄さもだが、江戸時代に藩内禁制であった浄土真宗が現在仏教信者の大半を占めていることも驚くべき事実である。それだけではない。鹿児島市内を見回すと南林寺墓地・福昌寺墓地・大乗院墓地・妙顕寺墓地・浄光明寺墓地・不断光院墓地などは整理されて住宅・学校・公園などの敷地に化けてしまっている。

さて、例の如く知名カードから県内の知名を拾いあげてみた。

A　堂之平(21)・庵平(5)・寺平(3)(〇〇寺平は他に7例ある)・塔平(1)・辻堂平(1)

B　観音平(13)・地蔵平(3)・大王平(3)・虚空蔵平(2)・薬師平(2)・不動平(2)・十王平(1)

C　墓平(4)・塚平(3)

江戸時代より以前は神社よりも寺院の方が人々の生活と密接に結び付いていたのだが、知名から見ると、堂之平と観音平が突出しているのが特徴的と言える程度。庵平・寺平・塔平などに比べると、薩摩国や大隅国には「堂」を営む程度の経済力しかなかったのだろう。観音平の突出は観音菩薩への信仰が厚かったことを示す。東西南北をそれぞれ守護する四方仏の中で、南方仏は観音菩薩であり、なるほど南の国だと合点する。堂之平の御堂は、多分、観音菩薩像が祀られていたのであろう。

去る六月半ば、東京の孫たちの顔を見に行ったついでに青山墓地に出かけた。大久保利通・松方正義・山本権兵衛・藤島武二などの墓の写真を撮るのが主目的。大久保利通墓はこの辺だったがと思って歩いているうちに、犬養毅・井上準之助・浜口雄幸などの墓が隣り合っているのに気付いた。これらの四人は皆、非業の最後を遂げている。その時、気付いた。青山墓地に眠る人々をリスト・アップすれば、日本の近代史をより具体的に理解出来る、と。以来、「国史大辞典」に記載されている人物で墓所の判る者を拾いあげている。青山墓地での都道府県別順位を掲げると、①鹿児島(40)・②東京(30)・③山口(17)・④高知(14)・⑤佐賀(11)。文字通り明治維新の薩長土肥になる。鹿児島生まれの明治の元勲たちが、廃仏毀釈・西南戦争・墓地の整理などで父祖の地に眠ることが出来なくなった一面も見落せない。

（鹿児島県地名研究会世話役）

自然現象にもとづく地名 (56)

――「平」…立　平

平田信芳

神社や寺院を信仰の場とする以前にも神秘的な自然を畏怖する原始信仰があった。それは民俗学の対象となるものだが、具体的な形として残る例は少なく、僅かに地名にそれが残される程度である。県内に残っている土俗信仰地名を拾い出すと次のようになる。

立平(30)・山神平(20)・才平(9)・弓場平(4)・供養平(3)・川神平(3)・水神平(2)・田神平(2)・射場平(2)・早馬平(1)・立神平(1)

山神平以下は山神を祀った所、塞神(サエノカミ)を祀る所、矢を射て豊凶を占い疫病退散を願う弓場平や射場平、死者供養の場、川神・水神・田神・早馬神(牛馬の神)を祀る所と大体理解出来る。立神平は立神として崇めているものが対象だろうが、立平となると抽象的で理解に苦しむ。それが数的に最多であるから厄介。中学一年の時に習った同類項をくくり出す因数分解のやり方を用いて分析してみる。

立山(89)・立迫(46)・立石(44)・立野(40)・立平(30)・立神(20)・立岩(12)・立元(10)・立場(8)。

尾立(59)・札立(札松・札元などを含む)(51)・花立(45)・柴立(44)・ノボリ立(35)・馬立(15)・鉾立(13)・矢立(9)・火立(6)・竿立(3)・帆立(3)

「○立」から考えてみると、花や柴を供えて拝む場所であったり、ノボリや竿を立てる神事の場その他祭祀の場とほぼ理解出来る。そうすると「立○」は、それらの神事を行なった場所や対象を示す表現(地名)とみなすことが出来る。

さて厄介なことに立平にもいろんな読みがある。これらの微妙な違いに日々悩まされる。

タテヒラ――鹿児島市川上・同市坂元・同市吉野・同市小山田・野田町上名・加治木町西別府・隼人町嘉例川

タテビラ――吉田町西佐多浦・大隅町中之内

タチヒラ――郡山町東俣・輝北町平房

立比良(タチヒラ)――垂水市柊原

タチビラ――鹿児島市犬迫・開聞町十町・頴娃町牧ノ内

(以下はルビ未確認)

立平――鹿児島市五ヶ別府・松元町上谷口・指宿市岩本・同市西方・山川町成川・笠沙町赤生木・入来町浦之名・牧園町万膳・佐多町伊座敷・伊仙町阿三

建平――鹿屋市船間・同市白水・大根占町城元・田代町川原

母の実家は「立山」という姓。タチヤマと読む。「立山」という地名は日本中いたる所にあり、ほとんどが「タテヤマ」と読む。何故「タチ」かと小さい時から考えて来た。

(鹿児島県地名研究会世話役)